
月下の狩人

野上みこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の狩人

【Nコード】

N9866X

【作者名】

野上みこと

【あらすじ】

世界には通称『闇』という未知の物質が存在した。その闇は人間の感情に反応しその者を異形の怪物『魔人』へと変える。これはそんな魔人達を狩る魔人 立花葵の物語。

ブローグ

あぶり
夕火の刻、粘滑なるトーヴ
はるば
遥場において回儀い錐穿つ。
総て弱ぼらしきはボロゴヴ、
かくて郷遠しラースのうずめき叫ばん。

『我が息子よ、ジャバウオックに用心あれ！
喰らいつく顎、引き掴む鉤爪！
ジャブジャブ鳥にも心配るべし、そして努
燻り狂えるバンダースナッチの傍に寄るべからず！』

ヴオーパルの剣ぞ手に取りて
尾揃しき物探すこと永きに渉れり
憩う傍らにあるはタムタムの樹、
物想いに耽りて足を休めぬ。

かくて暴なる想いに立ち止まりしその折、
両の眼を炯々（けいけい）と燃やしたるジャバウオック、
そよそよとタルジイの森移ろい抜けて、
怒めきずりつつもそこに迫り来たらん！

一、二！ 一、二！ 貫きて尚も貫く
ヴオーパルの剣が刻み刈り獲らん！
ジャバウオックからは命を、勇士へは首を。
彼は意気踏々（いきとうとう）たる凱旋のギャロップを踏む。

『さてもジャバウオックの討ち倒されしは真なりや？』

我が腕かいなに来たれ、赤射せきしゃの男子おのこよ！
 おお芳晴かんばらしき日よ！ 花柳かな！ 華麗かな！
 父は喜びにクスクスと鼻を鳴らせり。

あぶり　ねばらか
夕火の刻、粘滑なるトーヴ
はるば　まわりふるまきりうが
遥場において回儀い錐穿つ。
すべ
総て弱ばらしきはボロゴーヴ、
さことお
かくて郷遠しラースのうずめき叫ばん。

ルイス・キャロル作『ジャバウォックの詩』

赤い炎が燃え盛っていた。

その炎はばちばちと音を立て、踊るように蠢いている。まるで両手を掲げて狂ったようにステップを踏む人間のようだ。

周囲は熱気に包まれ、呼吸をする度に肺が焼かれたように熱い。確か今夜は満月で、柔らかな月光が煌々と辺りを照らしていたはずなのに、灰色の煙が舞い上がって空を覆い隠し、それを遮っていた。煙が少しずつ体内に侵入してきて中毒を起こしつつあるのか、意識が徐々に朦朧としてくる。そんな煙の臭いに混じって、僅かに肉が焼けたような臭いがする。その臭いの元は、そこかしこに横たわっている全身の皮膚が炭化した死体だった。

だが、どれも気にならない。
いや、気にする余裕などない。

汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚才才才才才！

まるで、地の底から響いてくるような重低音の雄叫びが、辺りに木霊する。

その、この世の全てを呪い、聞く者をみな狂気に誘うような声が、空気を震わせ、鼓膜を叩き、脳に到達する。

それに対して脳が発する電気信号はただ一つ。

こわい、
だ。

汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚汚才才才才才！

目の前で絶叫している獣は、獅子のようなたてがみ、狼のような顎あぎと、トカゲのような尻尾を持つ怪物だ。その漆黒の巨軀はゆうに四、五メートルはあるだろう。

この世のどんな猛獣をも凌駕する程の暴力的な外見だが、それよりも怪物がかもし出す何かが本能的な恐怖を呼び起こしてくる。

そんなこの世のものとは思えない恐ろしい怪物が目の前にいるから、周囲が炎と煙に包まれ、惨たらしい死体が転がっていても、まるで気にならないのだ。

俺の意識は目の前の怪物に釘付けだった。

生まれた時からずっと暮らしてきた、沢山の思い出がつまった家は全壊した。

俺を産み、今日まで育ててくれた父と母は死んだ。

だが、そんなことよりも……。

俺は怖かった。

ただ、ただ恐怖の虜だった。

地面に尻餅をついて、その恐怖の根源を見上げることしか出来ない！

目の前の怪物が、いつこちらに目を向けて、その顎で俺を引き裂き喰らうのか……。それだけが心配だった。

その時。

空を見上げて叫び続けていた怪物の聲がぴたりとやんだ。顔を下げ、俺に視線を向ける。

その瞳を見て、戦慄した。

それは、人間よりも圧倒的上位に君臨しているはずのそいつが、俺という下等なものを見下す目ではなかった。

怒りだ。

こいつは俺を……この世全てのものを憎んでいるんだ。

森羅万象、生きとし生けるものを、怒って、憎んで、呪って、崇めているんだ。

そこに生きているのなら、例え人だろうが、虫けらだろうが、こいつは一欠けらの容赦も無く殺すだろう。

きつと、それこそが、俺がこの怪物をここまで恐怖する真の理由なのだ。

俺は未だかつてここまで憎悪を向けられたことがあっただろうか。いや、ない。だって、普通の生物があそこまで何かを憎んだら、心が壊れてしまっに違いないから。

怪物がこちらに体を向ける。すると、その手から何かが落ち、転がってくる。俺はその真っ黒で丸くて、バレーボール程の大きさのそれを追うように視線を動かす。最初は何だかわからなかった。でも、それが俺の爪先に当たって動きを止めた時、ようやく何かわかる。

「ひッ!？」

それは、かつて父であったものの首だった。

炎に焼かれて黒こげになっているが、顔の作りや残ったパーツ、そして何より、生まれてから今までずっと一緒に暮らし、培ってきた絆がそれを父だと告げていた。

怪物がゆっくりと俺に近づいてくる。大腿で、地面を強く踏みしめるように一歩、また一歩とこちらにやってくる。

一瞬、何かに足を取られて怪物の動きが止まった。自らの足元に視線を下げると、緩慢な動作で面倒くさそうにその何かを蹴り飛ばす。放物線を描き、俺の目の前に落下する。それは地面に叩きつけられると、力なく跳ねた。

「か、かあさん……!」

それは、かつて母であつたものだつた。

俺は目尻に涙を浮かべながら、母の骸を力強く抱きしめた。

再び、怪物は歩き始める。炎をまたぎ、こちらに迫ってくる。

そこで、とうとう俺の心が折れた。

頭が真っ白になり、辛うじて理性で抑えていた感情が、まるでダムが決壊したかのようにあふれ出す。

「……た、たすけて」

命乞いなんて無駄だ。

そう思っている、口に出さずにはいられない。

「助けて……。助けて。助けてッ！」

涙と鼻水と涎で顔をぐちゃぐちゃにしながら懇願する。が、怪物は歩みを止めない。

「いやだッ！ 死にたくないッ！ た、たすけ……たすけてえええ！ ひiiiiiiii！」

体が痺れ、逃げ出すことも出来なくて、母を抱いたまま身を縮める。

気づいたら、怪物は目の前に立っていた。頭を垂れ、俺をじっと見下ろしている。俺は涙を流しながら、祈るように、ただひたすら「たすけて」を繰り返す。

怪物は右腕を振り上げた。俺はもうだめだとばかりに目を瞑る。

誰か……誰か、何でもするから、何でもするから助けてッ！

俺目掛けて、怪物の腕が振り下ろされた瞬間、

真横から風を切って飛んできた何かがその腕に当たり、爆発する。いや、腕に当たる直前の空間で爆発したと言った方が正しい。

その爆発で、怪物の動きが止まる。怪物は首を動かし、何かが飛んできた方向に顔を向けた。俺も恐る恐る、同じ方向に視線を向ける。

そこには二人の男女がいた。

一人は背広を着た、二十代後半から三十代前半の狐のような細い目をした軽薄そうな男だ。

そして、もう一人はカーキ色の革製のスーツに身を包み、燃えるように赤い髪を腰まで伸ばした、長身の女。切れ長の目が特徴的な絶世の美女で、トップモデルと言われたらすんなりと納得しそうだ。最初に二人を目にした時、この人達は願いが天に通じて自分を助けに来てくれた天使のような存在だ、と思った。けど、すぐにそれは大きな勘違いだったと悟る。

女が、こちらを見て笑った。それはこの世のものとは思えない程の妖艶な笑みで、健全な雄ならば誰でも魅了されてしまう程の魔力を帯びていた。

だが、俺の中で芽生えた感情は畏怖だった。背筋がぞくりと冷たくなり、腕には鳥肌が立っている。きつと、その女の表情の裏に隠された狂気を垣間見てしまったから。

女がこちらに近づいてくる。目の前まで来ると、俺を見下ろした。その瞳には何の感情も宿っていない。

「よく生きていたな、少年」

そう言つて、女は唇の端を吊り上げると、手を差し出してくる。

俺は一瞬躊躇ったが、その手を握った。

今思うと、これは契約だったのだ。決して反故には出来ない、悪魔との契約。

それが、俺の人生を闘争の日々に変えた、魔女との出会いだった。

後悔の矛先？

「サッカーやるヤツこの指とまれー！」

一人の少年が人差し指を立ててそう言うと、一人、また一人と他の少年達が集まってくる。

「よし、丁度十人いるから、五対五で戦おうぜ！」

少年達は二つのチームに分かれてサッカーを始めた。

みんな白黒の球を汗を飛び散らせながら必死に追いかける。

僕は庭にある一本の樹の木陰で、そんな少年達を羨望の眼差しで見つめていた。

いつもこうだ。

自然にあの中に混ざればいいのに、それが出来ない。

今よりも幼い頃、みんなの輪の中に混ざろうとしたが、上手く自分の意思を伝えられず、失敗したのが尾を引いているのだろうか。

仕方が無いので、持っていた本を読み始める。

孤独な現実から逃避するために暇な時はいつもこうで、ここの図書室にある本はもう大体読んでしまったから、この本を読むのはこれで二回目だ。

気づいたら僕はこの孤児院で生活していた。

僕には家族は無く、どうやら天涯孤独の身というやつだった。

職員の人達は暴力など理不尽な扱いをしてくるといったことはない。だけど、愛情を与えてくれるわけでもなかった。ただ仕事として、僕らに接してくる。

学校でもこんな感じた。

友達もいないし、教師もそんな僕のために進んでなにかをしようとはしない。

別に孤児だからと学校で苛められたりはしないから、辛いと感じることはなかった。けど、授業参観とか運動会とかで他の子供達の親が学校にやってきて仲睦まじい様子を目の当たりにすると、なる

ほど僕は不幸なんだなと実感する。

そんな風に幼少期を過ごし、やがて中学を卒業した。

義務教育が終わると、孤児院から学費は出ない。だから僕は定時制の高校に入学し、バイトで学費を稼いだ。

それでもやはり、友人はできなかった。

柄の悪い人や、年配の方など、打ち解けるのが難しい人種ばかりだったというのもあるが、やはり、僕には友達を作るという能力が欠如しているのだらうと思う。

結局、三年間を勉強とバイトのみで過ごした。

卒業式で同じクラスの人達が感極まって涙を流していたが、僕には何の感慨もなかった。

高校を卒業後、担任教師に薦められるままに決めた自動車整備工場に勤め始める。

そこでは今までと少々勝手が違っていた。

明らかに元ヤンの先輩達に気弱なところを見抜かれたのか、入社してすぐにパシリとして扱われるようになったのだ。

飲み物や食べ物を買に行かされたり、からかわれたり。

けど、別に何も感じなかった。

子供の頃から、ずっと周囲の人達を羨みながらも、傍観し続けてきた。楽しいことも、嬉しいことも、悲しいことも、辛いことも……、いつだって僕の関係ないところで起こっている。

だからそんな現実のことなど、僕には何の関係もない。僕はスクリーンに映し出された白黒の映画を観ている観客で、この人達はその映画の中の登場人物。だから、スクリーンの外にいる僕はいくら罵倒されても何も感じない。 なんて風に捉えていた。

ある日のことだ。

いつものように昼食を買いに行かされた。

今日は先輩達のリクエストで、工場の近くにある弁当屋に向かう。初めて行く店。

商店街の一角にあるその店は、テレビで宣伝しているようなチェ

イン店ではなく、歩道に面したカウンターの奥に小さなキッチンがあるだけのこじんまりとした作りをしていた。

そんな店の中では、白い三角巾を頭に被り、同じく白いマスクで顔を覆い、やはり白いエプロンを身に着けている数名のスタッフが忙しなく弁当を作っている。そして、カウンターでは一人の女の子が接客をしていた。

それなりに人気なようで、何人かの客が並んでいる。僕はその列の最後尾に並んだ。

しばらくすると、僕の番になる。

「いらつしやいませ、ご注文は何になさいますか？」

「えっと……」

僕は先輩達に言われたメニューを思い出しながら店員に目を向けた。

その子は肩まで伸ばしたやや茶色がかった髪がさらさらしていて、頬に少しそばかすがあり、つぶらな瞳が印象的な可愛い子だった。

僕は思わず見とれてしまう。

絶世の美女というわけでもない。雰囲気は暗く、飾り気の無い地味な少女だ。けれど、その素朴な愛らしさと、内から滲み出ている雰囲気は妙に僕の心を掴むのだった。

「……お客様？」

「あ、す、すみません！」

その日から、僕の白黒の映画に僅かに色がついたように感じた。

皿を洗う。

調理師免許のない俺が料理をするわけにもいかず、客足の途絶えない昼時の厨房での仕事はもっぱら皿洗いだ。

カランコロンと店の入り口に付けられた鈴が鳴る。

「葵ちゃん、新しいお客さん来たからお水とメニュー持って行つて！」

「はい！」

急いで水を人数分コップに注ぎ、お盆に乗せる。メニューを二つ脇に挟んで客の元へと向かう。テーブルの横に立つと、コップを置き、メニューを渡す。

「お決まりになりましたらお呼び下さい」

再びカウンターの奥に引込んで皿洗いに戻る。

この喫茶店 “アン・ドン・ジュアン” は女性客を狙った店だ。この店のランチセットは安い、美味しい、ヘルシーと女性を引きつけるポイントを押えている。さらに白を基調とした清潔でお洒落な内装のため、女子高生から熟年の奥様まで幅広い年齢層の女性達に人気があるのだ。

皿を洗っていると、カウンターの端に備え付けられているテレビから気になる音声が聞こえてくる。

『……ここ最近世間を騒がせている東京都N区T街の連続殺人事件に新たな犠牲者が出ました』

俺は皿を洗う手を止め、テレビに見入った。

ここ一ヶ月の間、隣街では三件の殺人事件が起こっている。被害者はいずれも十代後半の少年で、遺体はビルの間の路地裏にゴミのように置き去りにされていた。被害者の血液が遺体が発見された場所の壁や地面に大量に付着していたことから、犯人は生きたまま被害者を現場に連れてきて殺害 そのまま逃走したと思われる。

『……遺体はこれまでの被害者同様、両手足を潰され、胸を刺された状態で発見されました』

テレビでは遺体はただ“両手足を潰され、胸を刺された状態”としか報道されていないが、実際にはその他にも特筆すべき点がある。だが、それはあまりにも凄惨だからか、報道規制が敷かれているようだ。

「これで四人目……か」

「こら、葵ちゃん！ さぼってるど給料減らすわよ」

マスターのその一言で俺は慌てて顔を戻し、皿を洗い出す。

「はい、これ追加ね」

そう言つて、マスターは大量の皿を流しの横に置いた。

「それにしても、最近は物騒になつたわねえ」

手を動かしながら、

「そうですね」

と、相槌を打つ。

「被害者の子達、まだ子供でしょ？ 人生これからだつたのに、可哀想ねえ」

俺は手を止めて、マスターを見つめた。

「なあに？ 怖い顔しちゃつて」

マスターは何も知らないのだ。

何も知らないならば、そういう感想が出るのは仕方が無いのかも
しれない。

が、大体の事情を知っている俺からしてみれば、少年達が死んだ
のは因果応報。当然の報いだと思う。

つい先日、殺人現場で件の連続殺人犯に遭遇したが、虫も殺せな
い程気弱そうな男だった。あいつに会えば、例え事情を知らなくて
も、少年達がよほどのことをしたと想像出来るだろう。

「なんでもないっす」

俺は視線を戻し、皿洗いを再開した。

夏美^{なつみ}と出会つたのは今から三年前の夏だった。

高校を卒業した後、自動車整備工場に勤め始めて間も無い頃。入
社してすぐに先輩達のパシリとして扱われていた僕は、彼らの昼食
を買いに工場の近くの弁当屋に行った。彼女はその弁当屋で僕と同
じく高校を卒業と同時に働き始めていた。夏美の第一印象は、顔は

可愛いけれど雰囲気は暗く、飾り気の無い地味な少女だった。でも、何故か妙に彼女のことが気になっていた。

その後も僕は度々弁当屋を訪れ、何度か夏美に話しかけようとしたが、結局勇気が出せず、弁当を購入するやりとり以外の会話をすることは出来なかった。

そんなある日。

僕が同期の一人に「弁当屋の女の子が気になっている」と言ったのが先輩達にばれ、無理矢理告白させられることとなった。

先輩達に半ば強引に弁当屋まで連行されていく。

裏口のある路地裏に入ると、

「俺達はここから隠れて見てるからな」

先輩達は路地裏への入り口の脇に身を潜める。

僕が困り顔でそわそわしていると、弁当屋の裏口が開いた。

思わず、あつと声が出る。

出てきたのは夏美だった。白い三角巾に白いエプロン。いつもの接客をしている時のスタイルのままだ。

先輩達は一体どうやって彼女を呼び出したのだろう。

なんて思っていると、

「ほら、とつとと告ってこいよ」

先輩の一人がにやにやと嫌らしい笑みを浮かべながら、僕の背中を押す。僕はバランスを崩し、よろけたままの姿勢で夏美の前に出た。我ながらすごく格好悪い。

夏美はそんな僕を見ると一瞬驚いたが、すぐに険しい目つきになった。

「あたしのことを呼んでいるっていうのはあなたですか？」

「は、はい……たぶん……そうです、けど」

あからさまに警戒している夏美を前にしてたじろいでいると、先輩の一人が小声で「告白しろ」と急かしてくる。

こんな雰囲気の中告白したって絶対に成功するわけがないと思っ

「こういつの困ります。もうやめて下さい」

夏美はそう言い放ち、踵を返すと店の中に戻っていった。

辺りが静寂に包まれる。

だが、すぐに先輩の一人が吹き出し、

「こ、告白する前に振られてやんの！」

と、言うところ、他の先輩達も釣られるように笑い出す。

どうやら夏美には完全に嫌われてしまったようだ。僕はがっくりと頭を垂れた。

それから一ヶ月が経ったある日のことだった。

その日は休日だったけど特にやることもなかったのも、本屋で雑誌を立ち読みしたり、ファーストフードで安いコーヒーを飲んだりして時間を潰した。

夕日が街を照らし、林立する建物がオレンジ色に染まる頃、やることがなくなった僕は帰路につく。

商店街を抜けて、隣街との境に流れている川沿いの土手を歩いてみると、見知った少女がその斜面に座っていた。

その少女　夏美は肩まで伸ばした茶色がかった髪を風になびかせて、空を眺めていた。普段、弁当屋で白い三角巾にエプロンのイメージが強い彼女が、Ｔシャツにデニムといった普段着姿でこんなところにいるのがなんとも不思議な感じだった。

声をかけたい。

でも、告白に失敗してから、あまりにも気まずいので弁当屋には行ってなかった。彼女は僕のことなんてもう忘れてしまっているかもしれない。

だけど、これはチャンスだ。彼女と仲良くなるには、ここでなんとかするしかない。

「あの……」

勇気を出して声をかける。

すると、夏美はぎくりと肩を震わせて、きょろきょろと周囲を見

回し、自分以外に誰もいないことを確認するとこちらに振り向いた。
「えっと……確か、前にあたしのことをお店の裏に呼び出した人、
ですよ？」

どうやら僕のこととは覚えているようだ。

「は、はい、そうです！……隣、いいですか？」

夏美は一瞬躊躇したが、無言で頷いた。

夏美の隣に腰掛けると、一緒になって空を眺める。沈みかけた夕
日が眩しいくらいに赤く光っていた。

「この間はごめんなさい。実はあれ、先輩達の命令で……」

この機会に少しでも悪い印象を払拭したい。

「あたしも頭ごなしにキツイこと言ってごめんなさい。あの時はち
よっと先輩とトラブルがあつてイライラしていたから……」

夏美は伏し目がちに言った。

「お互い、先輩で苦労しているみたいですね」
「ですね」

それから、僕は表面上では冷静を装いながらも、必死に頭を回転
させて、会話を膨らませた。普段、とても内気で無口な人間とは思
えない程口を動かす。僕の人生ではあまりしない使い方をしている
せいか、顎がみしみし鳴って痛い。

しばらく僕の話が無表情で聞いていた夏美が、

「ぶっ……」

突如、吹き出した。

「あ、あれ？　ここ、笑うところですか？」

「ご、ごめんなさい。あなたの必死な感じがおかしくって、つい笑
ってしまいました」

どうやら冷静を装うことは出来ていなかったらしい。

ちよっと格好悪かったけれど、おかげで良いものが見れた。それ
はまるで、野に咲く一輪の花のような笑顔。

「君はそういう風に笑うんだね」

なんて僕が言うと、彼女は頬を赤らめて俯いてしまった。僕も臭

いこと言っちゃったなと恥ずかしくなる。それっきり会話が途切れて、お互い無言になってしまう。

だけど、夕日に照らされた彼女の横顔をただ眺めているだけでも、退屈しなかった。

「なつ……み」

空を見上げ、届くはずもない月に手を伸ばす。もう二度と戻れない、あの幸せだった日々を思いを馳せるかのように。

ここはビルの間にある路地裏だ。人が三人は並べる程の幅があるが、大通りからは外れているので街灯の明かりはまるで入っていない。だから、辺りに血を撒き散らせて横たわっている肉塊を照らす光は、仄かな月明かりだけだった。

僕はその地面に置かれている肉塊と、赤黒く染まった己の手を呆然と見つめる。

「なんてことだ……。もう、三人も殺してしまった。僕はこんなにも残忍な人間だったのか？」

誰に言うでもなく、自問した。

いや、こいつらは人じゃない。人とは認めない。何故なら、僕の大事な夏美を死に追いやった罪人だからだ。残りの二人にも残酷な死をもって罪を償わせなければ。

だったら、このまま走り続けるしかない。

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

その雄叫びは、今の僕の姿に相応しい重低音。熊や獅子のような大型の獣の咆哮。深夜で人通りがなく、静まり返った周囲に響き渡った。

ひとしきり叫ぶと、僕の姿は人に戻っていた。頭を下げた再び肉塊を見下ろした時、

「へえ、また派手にやったもんだな」

背後 路地裏の入り口の方から声がする。

振り返ると、そこには一人の人間が立っていた。

この闇に溶け込むような黒いロングコートに身を包んだ、黒髪の男。逆行で表情は伺えないが、鋭い切れ長の目がナイフのようにきらりと光っていて、どこか挑発的な印象を受ける。

怖い……。

ただの人間など、今の僕ならば簡単にバラバラに出来るというのに、何故かへびに睨まれたカエルのように恐怖していた。

この、男性にしてはやや小柄で線の細い人間に一体何があると言うのだろう。

「君は一体……何者なんだ？」

僕の声は震えていた。

「……俺が誰かなんてどうでも良い。心配するな、別にこのことは誰にも言わないし、今は何もしない。だが……」

お前が人間でなくなったら、殺すがな。

そう言い残して、男は去っていった。

“アン・ドン・ジュアン”でのバイトを終えた俺は、店の奥にある畳三枚程の狭い荷物置き場に入る。エプロンを外して、簡素なハンガーラックにかかったハンガーにかけると、その横にかけてあったコートを取って羽織る。俺のお気に入りの細身の黒いロングコートだ。

荷物置き場を出ると、マスターがキッチンで明日の下ごしらえをしていた。

「お先に失礼します、お疲れ様です」

「お疲れ様でした。暗いから気をつけて帰ってね」

「ははは、大丈夫ですよ。女子供じゃないんだから……」

「うふふ、わからないわよ？ 葵ちゃんみたいな可愛い男の子が好きな変質者がいるかもしれないし……突然、こんなことされるかもしれないわよん」

そう言いながら、マスターは俺の尻を撫でてくる。あまりにも気持ち悪くて、全身に怖気が走った。

「ひ、ひい！ そんなのではありませんから！ それじゃあ失礼します！」

これ以上セクハラがエスカレートすることを回避するため、そそくさと店を出た。

「んもう、つれないわねっ」

店を出た時、タイミングを計っていたかのように携帯が鳴る。

ポケットから取り出すと、ディスプレイには“冬子”の文字。通話ボタンを押すと、携帯を耳に当てた。

「何かわかったのか？」

すると、電話の相手は呆れたように溜息を吐く。

「電話に出て、第一声がそれ？ せめて、“もしもし”くらい言いなさいよねっ」

「……悪い。それで、何かわかったのか？」

「……はあ、葵に期待したのが間違だったわ。それで、例の事件のことなんだけど……」

この電話の相手は“芥川冬子”あぐたがわとうこ。以前、とある事件がきっかけで出会った、ちょっとした知り合いだ。情報収集能力に長けているから、何か調べ物が必要な時は手助けして貰っている。今、世間を騒がせている連続殺人犯の正体が“白井達也”しろい たつやであるということや、その動機を知ることが出来たのもこいつのおかげだ。

「……太田夏美はやっぱり……」

冬子の話を聞き終わると、俺は全てを理解した。太田夏美は何故死んだのか……そして白井達也が少年達を殺す本当の理由を。

「なるほど、そういうことか」

「どういうことよ？ なんでこんな事件のことなんて知りたがるの

よ？ 大体、いつもいつも変なことばかりわたしに調べさせて、一体何してるのよ？」

「ありがとうな、今度またランチ奢るから」

そう言つて、携帯を耳から離す。

『ちよつと、聞いているの？ ちゃんと説 』

俺は有無を言わず、携帯を切った。

悪いな、こればかりは説明出来ないんだ、と心の中で謝る。

おそらく、今頃ヤツは最後の“復讐”をしているに違いない。

全てを終えた後、人に戻るならそれでいい。だが、それは多分無理だろう。ヤツはもう、人の心を失いかけている。

空を見上げた。そこにはあと数日程で満月になるであろう欠けた月が、ぼんやりと浮かんでいた。

最後のターゲットは簡単に見つかった。

他の仲間達がみな殺されているというのに、のんきに夜の街を歩いている。

早足でターゲットである少年の前に回り込むと、こちらに歩いてくるそいつに向かって歩き出した。

「 ってえなあ！」

僕と少年の肩が強く当たる。

すると思惑通り、少年は僕にからんできた。

「おい、てめえ！ 人にぶつかつておいて、謝罪もなしかよッ！？」

土下座して謝れ！」

「……………」

僕は目を合わせないようにして、沈黙を貫く。そんな様子を見て、気弱な良い力モだと思つたのだらう。下品な笑みを浮かべる少年。

「……丁度良いや、色々あってむしろくしゃしてたんだ。ちよつとこつち来いよ！ おらッ！」

少年は僕の手首を乱暴に掴むと、力づくでひっぱっていく。

程無くして、細い路地裏に着いた。

そこは、月の光さえも届かない。例えば大声を上げたとしてもすぐそこに騒がしい歓楽街があるため、誰かの耳に入ることはないだろう。

彼らのような不良は、このような何をしても外に漏れない場所を熟知している。おかげで僕は楽に狩りを行なうことが出来るわけだが。

「金を出したら見逃すとか言わねえぞ？　でも、安心しろよ。好きにボコった後にサイフごと頂くからよ」

少年は醜惡な笑みを顔に貼り付けたまま、両手を重ねて指を鳴らす。

「君は……僕のことを覚えていないのか？」

「ああん？」

僕が呟くと、少年は顔をしかめる。

「なんだ、お前さん……ひょっとして、前にもサンドバッグになって頂いたことでもあるんですかねえ？　誠に申し訳ないんですが、当方、サンドバッグのみなさんのことなんて、いちいち記憶に留めてごぜいません。ぎやははははッ！」

何が楽しいのか、少年はけたけたと笑い出す。

僕は深く溜息を吐くと、

「……結局、誰一人として、僕のことなんて覚えていなかった……。大事な夏美を自殺に追い込み、僕の幸せだった日々を地獄に変えたっていうのに……。人の人生を滅茶苦茶にしたっていうのにッ！」

「あん？　ナツミ？　知らない名前だなあ」

「貴様あああああッ！」

僕は完全に切れていた。その怒りに呼応するかのように辺りの闇がその濃さを増し、僕を包む。

「な、なんだあ！？」

闇の中で、僕の体が作り変えられていく。みしみしと音を立てて、

少年の両脚は赤黒く変色し、まるで軟体動物のようにぐにゃぐにゃなった。

「た、たたたたたたすけ……」

少年は顔を涙と涎と鼻水でぐしゃぐしゃにして、股間を小便で濡らし、小刻みに体を震わせながらもうつ伏せになり、残った右腕を使って地面を懸命に這って逃げようとする。

そんな少年の努力をあざ笑うかのように、大股で少年の体をまたぎ、立ち塞がった。絶望感に苛まれ、真っ青になった少年の残った右腕を破壊する。

「あはははは！　なんて無様なんだ！　どうだい？　君達が夏美にしたことを少しでもわかってくれたかい？」

しかし、最早少年にその言葉を理解する程の知性は存在しなかった。

「あひつ！　あひやひやひやひやひやひや……！」

少年は涎を垂らし、壊れたように笑い出す。

あまりの恐怖ゆえにとうとう狂ってしまったのか、それとも痛みを和らげるために過剰に脳内麻薬が分泌されているのか　そのどちらかはわからない。でも、どんな形にせよ、少年に意識があることは喜ばしいことだった。何故なら、最期の最後まで、たつぷりと苦しんでくれるのだから。

このままこの光景を眺めているのも一興だけれど、放っておいたら死んでしまう。やはりいつもの殺害方法にこだわりたい。

右手で手刀を作る。すると、鋭く伸びた硬い爪が一本の幅広の刃のようになり、僕の右手はまるで刺すことに特化したインドの刀剣ジャマダハルのようになった。

左手で少年の首根っこを掴み、体が動かないように固定する。手刀を作った右手を弓を引くように振り上げた。

「死ねえええええええッ！」

勢い良く、少年の股の間に殺意を伴った手刀を突き刺す。僕の右手はそのまま肉と内蔵を破りながら、体内を突き進む。肋骨を砕き、

胸の皮を引き裂き、血液と脂肪に塗れた爪先が体外に出る。

「ぐおおおおおおおおッ！」

僕は少年の体ごと右腕を持ち上げ、アスファルトの地面に思い切り叩きつけた。少年の頭は割れて、脳漿が飛び散る。

腕を引き抜く。すると、少年の体から止め処なく血が流れ出し、地面に真っ赤な血溜まりができてあがる。

我ながら、暴力の限りをつくした。確認するまでもない。少年はもう絶命している。

「……これで全てが終わったよ、夏美」

僕は空を見上げた。暗黒の空に丸い穴が穿たれている。あともう少しで満月となるだろう。

全てが終わったはずだ。

でも、何故だろう。なんだか、まだ僕の中にある焦燥感のようなものが晴れていない。そう思うと、動悸が激しくなり、いてもたってもいらなくなる。

気づいたら、僕は叫んでいた。

まず、両手足をなんらかの方法で破壊する。そして、トドメは股間から胸にかけて何か鋭利な刃物を刺しこんだ後、地面に叩きつけていた。おそらく、これは白井達也の死んだ恋人、太田夏美に少年達がした仕打ちを再現しているのだろう。

今回の連続殺人事件の被害者は五人からなる不良グループのメンバーだった。彼らは暴行、恐喝、万引きなどを繰り返す典型的な非行集団だ。

そんな小悪党にすぎなかった彼らは、ある晩、何を思ったのか帰宅途中の白井達也と太田夏美を誘拐した。

少年達は白井達也に暴行を加えて拘束。その後、白井達也の目の前で太田夏美の両手足を折り、輪姦した。犯行が終わると、二人を

残り、少年達はそのまま去っていった。

数日後、五人の少年達はあっさりと警察に捕まった。少年達が犯行のことを周囲に言いふらしたため、足がついたのだ。尋問の際、動機を聞かれた少年の一人は『リア充っぽくてムカついたから』と答えた。

少年達にはまともな動機もなく、まったく同情の余地が見られなかった。だが、裁判の結果は 無罪。何故なら、当時彼らは十五歳から十七歳の少年だったからだ。

結局、彼らは保護観察処分となったが、殆ど野放しの状態で、各々好き勝手に生活していた。

「……なんだかな」

わたしはパソコンのモニターに表示されている、自ら調べた情報を読み返すと、ぼつりと呟いた。

なんとなくわかっていた。今、世間を騒がせている連続殺人の犯人が白井達也であるということが。

でも、なんで葵はこのことをわたしに調べさせるのだろう。

わたしには人よりも優れた情報収集能力がある。だから、以前から葵はわたしにこういった類の調べものをさせるのだ。いつも気になって理由を尋ねるのだけど、その度にはぐらかされている。ちなみに、調べものの報酬は葵が働く喫茶店のランチという、労力にまったくそぐわないものだ。それなのに、何故、毎回葵の頼みを聞くのかと言うと……それはわたしにもよくわからない。

「一体、何やってるんだか……」

窓ごしに夜空を見上げた。星一つ、雲一つ無い空に白く丸い月だけが孤独に浮かんでいた。

「今日は満月か……」

わたしは一人ごちた。

空を見上げていた。

そこにはただまん丸い月だけがあつて、他には何も無い。
でもその月は、真つ赤だつた。まるで、生き物の皮膚にアイスピ
ツクを突き立てて穴を開け、その中に流れる赤い血液が覗いている
ようだ。だから、今にもそこから大量の血液がどろどろと流れ出て
きて、地上を赤く染め上げるんじゃないかと思つた。

ふと、視線を落とす。

そこには手足がぐちゃぐちゃに壊れ、胸と股間から血液をポンプみたいに流し続けている死体があった。

また、復讐を果たせたという満足感が僕を満たしている。

でも、この人は誰だったわけ？

体が痛い。

おかしいな。

もう、あの少年達は全員殺したはずだ。

だから、復讐はとくに終わっているはずなんだ。

頭が痛い。

そんな……。

じゃあ、これは一体、誰の死体だって言うんだ？

心が痛い。

まさか。

これは、何の罪も無い、無関係な人間？

[illegible]

ああ！」

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だッ！

僕が、無関係な人間を殺すわけがない！

きつとこいつも夏美を苦しめた人間の一人なんだ！

だからこれは復讐なんだッ！

その時。

バイクのエンジン音が耳に入る。

まるで、それはあらゆる獣の咆哮。刻一刻とここに近づいてくる。その音が大きくなるに連れて、僕の鼓動も大きくなっていく。

僕を食い殺しに来るとも言うのか？

甲高いブレーキ音が鳴り、この路地裏の入り口に黒いバイクが停車する。

「白井、達也……」

バイクに跨っている人が僕の名を呼んだ。

いや、それは人ではない。

全身はこの闇夜よりみなお黒い、暗黒。その漆黒の皮膚はまるで爬虫類のようで硬く冷たそうだ。だが、生き物というよりロボットのような印象を受ける。何故なら頭部がフルフェイスのヘルメットのような仮面で覆われているからだ。

その怪人はバイクを降りると、こちらへゆっくりと向かってくる。

僕は直感していた。

以前、路地裏で遭遇した黒衣の男……。

おそらく、この怪人はあの男だ。

でも、以前のような恐怖心は芽生えず、冷静に見つめることが出来た。

「やっぱりな」

怪人は僕の足元にある死体を見て呟いた。

後悔の矛先？

俺はバイクに乗って、街中を走り回っていた。時間が時間だけに他の車両は殆ど走っておらず、通行人も見当たらない。

臭う。

闇の臭いがぶんぶんする。

獲物はすぐ近くだ。さらに感覚を研ぎ澄ませた。

狩人の俺には獲物の居場所を嗅ぎつける嗅覚のようなものが備わっている。以前、白井達也に遭遇したのも偶然ではなく必然だったのだ。もっとも、あの時はまだ俺の獲物ではなかったが。

その時、心臓が一度大きく鳴った。

ブレーキペダルを握って急停車し、周囲を見回す。近くのビルとビルの隙間にできた真っ暗な路地裏の奥……それはまるでスポットライトのような月明かりを浴びて、そこに佇んでいた。

体長は約三メートル。全身は毛むくじやらで、まるで毛糸のお化けのようだ。手先からはナイフのように鋭く、長くて頑丈そうな爪が生えていた。

「白井、達也……」

いや、おそらくこいつはすでに人間ではない。だから、これは白井達也ではなく、“かつて白井達也であったもの”と表現する方が適切なかもしれない。

バイクを降りると、ゆっくりと白井達也に近づいていく。

どうやら、細い通路の奥　白井達也が立っている辺りには広い空間ができているようだ。そんなことがわかるくらい接近すると、ヤツの足元に置かれている肉塊が目に入る。それは手足が破壊され、胸と股間に穴が開いていた。白井達也の体は返り血で所々赤い。間違はなく、これはヤツがこさえた死体だ。

「やっばりな」

白井達也は五人の少年達への復讐を遂げた。にも関わらず、さらに無関係な人間を殺した。

もうそれは復讐などではない。白井達也は相手が誰であろうと、太田夏美と同じ目に合わせて殺すだけの殺人マシンへと変貌してしまったのだ。

白井達也と対峙する。

「こうなることは、わかっていた」

俺がそう言うと、白井達也は首を傾げる。まだ、言語を理解出来る程度の知性は残っているらしい。しかし、それを失うのも時間の問題だろう。

約十メートル程距離を開けて、様子を伺う。

ヤツの体は以前会った時とは段違いだった。特に目立っている体毛や爪を抜かしても、四肢、胴、首の筋肉の発達具合が尋常ではなく、人とは大きくかけ離れている。おそらく、人間の常識は通用しないだろう。

だが、それでも俺はこういう化け物との戦闘には慣れている。対して、ヤツはせいぜいひ弱なガキを五人と、そこに転がっている哀れな犠牲者一人を一方向的に殺しただけに過ぎない。だからこちらの方が有利だ。

腰を軽く落とし、構える。

いつでも殺し合いに望める心構えをする。

すると、俺が発する殺気を感じ取ったのか、白井達也も身構えた。お互いの間にぴりぴりと緊張が走る。

「……………」

そんな緊張状態の中にあっても俺は心を平然と保ち、氷のような眼差しで相手を観察していた。

「がああああああああああああああああああッ！」
だが、素人である白井達也は、その緊張感に耐え切れなかったようだ。心に圧し掛かる重圧を振り払うかのように叫ぶ。

「来るッ！」

白井達也は俺に襲い掛かってきた。その尋常じゃない脚力でコンクリートの地面を陥没させる程蹴ると、たった一步で距離を詰めてくる。身体能力は俺を遥かに超えているようだ。

「ちっ！」

横に飛んでかわす。先程まで自分がいた場所に目を向けると、ヤツが着地と同時に放った一撃によって、地面がえぐれていた。

俺は肝を冷やした。脚力だけじゃなく腕力も桁外れだ。もし、あの腕が繰り出す一撃をまともに喰らったら、再び立ち上がることは出来ないだろう。

「ごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

白井達也は飛び上がり、両腕を振りかぶった。そしてそれを着地と同時に叩きつけるように振り下ろす。

だが、俺は悠々とバックステップでそれを避けていた。

「があああああああああああああああああああッ！」

三度、白井達也は飛び掛ってくる。

身体能力は優れているのかもしれない。だが、ヤツには経験が足りなかった。ゆえに攻撃は単調で、大振りだ。だから簡単に先を読み、かわすことが出来る。

でも、このままかわし続けていてもヤツを倒すことは出来ない。かといって迂闊にヤツに近づくことも出来ない。

あの高速で振るわれる豪腕。威力も恐ろしいが、リーチが俺よりも圧倒的に長い。遠距離攻撃手段の無い俺がヤツにダメージを与えるには、長い腕をかくぐり、あの間合いの中に潜り込まなければならぬ。だがそれは、小型の竜巻に突っ込んでいくようなもの。

自殺行為だ。

「ふっ」

……自殺行為？

狩人になってから、常に奈落の上の綱渡り状態。幾度となく厳しい戦いを強いられてきた。でも一度だって背を向けたことは無い。

なら、今回だって渡りきってやる。

白井達也は俺の目の前に迫ってきた。右腕を振り上げると、爪を突き刺すように手刀を繰り出してくる。

俺はその腕を頭でU字を描くように潜り、ヤツの右側面に回りこんだ。

「シッ！」

左足を内側に回転させ、その勢いを腰、左腕に伝達する。肘を直角に曲げ、ハンマーで打ち抜くようにフックをヤツの脇腹にヒットさせた。

「ぎいいいいいいッ！」

ヤツの防御力はそれ程高くないのか、パンチを食らうと体をくの字に曲げた。

「もういつ　！？」

追撃しようと思った矢先だった。ヤツは体勢を崩したまま、おもむろに腕を下段から上段にアップアをするかのように振り上げる。

すぐさま後方に飛ぶ。　が、胸の装甲がかなり削られていた。

素人の恐るべきところの一つは、稀に予測不能なトリッキーな動きをすることだ。普段、単調でわかりやすい動きばかりのくせに、突如予想外の攻撃を混ぜてくるのだ。

格闘技において、パンチやキックなどの打撃技を放つ際、必ず下半身に予備動作が見られる。それを見て、経験者は次の攻撃を予測するのだ。これは毎回視認してから動くというよりは、殆ど条件反射であると思われる。

だが、素人の攻撃にはそれが無く、純粹に腕力のみで技を繰り出す。それでも素人はパンチを打つ際に腕を弓なりに引くなどといった無駄なモーションがあるから、まずプロにその攻撃は当たらないのだが、今のようにバランスを崩した状態で、経験者にはありえない。練習で体に刻み込まれた条件に当てはまらない動きをされると、例えプロでも一瞬困惑し、動けない。しかし、そういった攻撃にはキレが無いため、威力が無い。せいぜい目くらまし程度の効果しか無いだろう。

でもそれは、ただの人間にのみ当てはまることだ。この怪物の豪腕ならば、例えばバランスを崩した状態で、体重が乗らない腕力のみで頼った攻撃でも、相手に十分なダメージを与えるだろう。その証拠に銃弾をも弾く俺の装甲にくつきりと爪の痕が刻まれている。

「があああああああああああああああッ！」

そこからの白井達也はまるで暴風のようなだった。実際ヤツが腕を振るうと風が起っている。

間髪入れず、がむしゃらに両腕を動かし、攻撃してくる。しかし、どれも見え見えで、避けるのは容易い。もしヤツに格闘技の経験があったら、こうはいかなかっただろうが。

「シッ！」

ヤツの攻撃の合間に素早くパンチを入れる。先程のような失態を犯さないように、深追いはしない。

「ぜはあ……ぜはあ……」

まったく休まず体を動かし続け、さらには俺の攻撃を何度もその身に浴びたから、ヤツの体力はかなり消耗していた。それでも流石というべきか、だいぶ動きが鈍くなっているが、それでも手を休めない。

「せいッ！」

俺は足を真っ直ぐ突き出し、前蹴りをヤツの鳩尾に食らわせる。

白井達也の巨体は後方に吹っ飛んだ。

「そろそろ、終わりにさせてもらっぜ」

俺は前傾姿勢を取り、右脚に力を集中する。

「……？」

白井達也はふらふらと立ち上がると、こちらに向かって両腕を突き出した。

嫌な予感がする。

あれは素人だが、殺人マシンだ。この殺し合いの最中に無駄なこととはしないだろう。下手をしたら、俺にとって致命的な事態に陥るかもしれない。

その時。

白井達也の両腕の体毛が、物凄い勢いでこちらに向かって伸びた。

「しまッ！」

予感は的中した。

しかし、気づくのが僅かに遅かったようだ。咄嗟に真横に飛んだが、体毛はヤツの意思通りに動くのか、途中で方向を変え、俺の体を捉えた。

体毛が俺の両手足に巻きつく。

「くっ」

あつという間に体を拘束されてしまった。

“ヤツら”はただひたすらに己が抱いた一つの欲求を満たすためだけの存在。白井達也は復讐をしたいという欲求のみを行動原理に持っている。今までの復讐対象者はヤツの従来のも身体能力だけで十分復讐を果たすことが出来た。だが、俺相手ではそれが叶わなかった。それゆえにヤツはこの短時間で進化したのだ。

なんとか逃れようともがくが、完全に固定されて、ぴくりとも動かない。この体毛は柔軟さを兼ね備えながらも恐ろしく丈夫だ。“

切れ味の良い刃物でも断ち切ることは出来ない”だろう。

「これもガキ共の真似事がよッ！」

白井達也はそんな皮肉になど耳を貸さず、体毛を動かし、ゆっくりと俺の体を持ち上げた。

一体何を始めるつもりなんだ……？

何をするにしても、ろくなことじゃないことだけは確かだ。

徐々に空へと上がっていく。俺は体を大の字に固定されていて、白井達也と体毛で繋がっている。まるで、ヤツが風揚げをしている、俺がその風のようだ。

ビルの三、四階相当の高さまで上がった時、ようやくヤツの狙いを悟る。

「マズイッ！」

だが、気づいたところで身動きの取れない俺にはどうすることも

出来ない。

下から俺を見上げる白井達也の口角が、少し釣りあがったように見えた。

その瞬間。

俺の体は物凄い速さで落下した。

「がはッ！」

白井達也は体毛を鞭のように操り、俺を地面に叩きつけたのだ。コンクリートの地面に裂け目が生じる。全身がバラバラになるかのような激痛が走った。もし、俺が生身の人間だったら、本当に体がバラバラになって、間違いなく即死しているだろう。

再び、空中へと上がっていく。

先程と同じくらいの高さまで上がると、また地面に叩きつけられる。

「ぐッ……」

ダンプカーに跳ねられたかのような衝撃を体に受け、苦痛と呼吸困難に襲われた。あまりの苦しみに呻き声を上げる。

またしても、持ち上げられていく。

体が空に上がっていく時間が妙に長く感じる。その間中、何度も地面に叩きつけられる時のことを想像して、身がすくんだ。だが、命乞いなどしてやらない。

「ごはッ！」

何度も何度も叩きつけられる。

その度に地面が陥没し、蜘蛛の巣のような亀裂が走った。それと同じように体中の装甲が砕け、ひびが生える。

もう何度地面とキスしたことだろう。

体中の感覚があまり無い。目の前が白く霞んでおり、気を抜くと意識を手放してしまいそうだ。

俺が動かなくなると、体の戒めが解かれていく。

手足から完全に体毛が解けると、収縮し、元の長さに戻った。

白井達也が仰向けに寝かされた俺にゆっくりと近づいてくる。俺

を見下ろすと、不気味に顔を歪ませた。おそらく、これから手足を砕き、股間から爪を突き刺し、頭を割るという、いつもの儀式を始めるつもりだろう。

俺の左腕を掴もうと、手を伸ばしてくる。膝を折り、前傾姿勢で覆いかぶさってきた。

今まさに、俺の腕が掴まれるといった瞬間　白井達也はびっくりと体を震わせると、動きを止める。

「……………」

ヤツは自分の脇腹を見下ろすと、不思議そうに首を傾げていた。どうやら理解出来ていないようだ。何故、自分の腹に“刃”が刺さっているのか。

俺は“右手の先から伸ばした刃”を引き抜く。すると、ヤツの腹からは生臭い血液が流れ出た。

「ぐぶッ」

白井達也は口から大量の血液を吐いた。両膝を地につけると、ゆっくりと体が傾いていく。

「ぐ……………」

俺は力を振り絞り、こちらに倒れかかってきそうだった白井達也の首筋に横から蹴りを入れた。ヤツはそのまま右側頭部から地面に突っ込む。

立ち上がり、白井達也を見下ろす。

俺には予想出来ていた。

動かなくなれば、白井達也は必ず、少年達に毎回律儀に行なっていた“復讐”を始めるだろうと。だから、俺はあえて動かなくなつたフリをしたのだ。案の定、ヤツは無防備に近づいてきた。完全に俺が動かなくなったものと信じ、隙だらけで覆いかぶさってきたのだ。だからその隙について、俺の“体中のどこからでも刃を出せる能力”を発動させ、ヤツの腹に突き刺したのだった。

「……………今度はこっちの番だ。白井、達也」

日が傾き、空が茜色に染まっている。遠く空の上を飛ぶカラス達
が、沈み行く夕日を惜しむかのようにカアカアと泣いていた。

その日は偶然にも二人の休日が重なったから、夏美のたつての希望で少し遠出をして遊園地へ行つて来たのだ。

「いやあ、今日は疲れたね」

僕がそう言うと、夏美は口元に手を当てて、くすりと笑った。

「あれだけはしゃいだらね」

夏美が遊園地に行きたいと口にした時、僕は遊園地なんて子供っぽいなと内心小馬鹿にしていた。どうせ、どれも子供騙しなんだろうとタ力をくくっていた。ところが、蓋を開けてみるとまったくそんなことはなかったのだ。

まるで不思議な世界に迷い込んでしまったと錯覚するかのような外観。客を引き込むストーリー性を持ったアトラクション。銃で敵を撃つと点数が加算されていくゲームのようなアトラクション。スリル満点のジェットコースター。そして、トドメに幻想的で煌びやかなパレードが、僕のハートを鷲掴みにしたのだった。

僕はあまりの面白さにまるで童心に帰ったかのようにはしゃぎ回った。でも、大きなお友達のそんなテンションは傍から見たら異様だったのか、周囲の人達はみな見てはいけないものを見てしまったかのように目を逸らしていた。でも、僕はそんな周囲の目など気にならなかった。

肝心の夏美はというと、初めは顔を赤らめて他人のフリを決め込んでいたが、途中から吹っ切れたのか、苦笑しながらも僕のノリについてきてくれたのだった。

「まさか、遊園地があんなに楽しいものだとは思わなかったよ」

思えば、遊園地に行ったのは生まれて初めてだった。こんなに楽しいことを知らなかったなんて、ちよつと損をしていた気分だ。

でも、大好きな夏美と一緒に行けたんだ。今までの人生のことを

考えると、それだけで物凄く幸せなんだよな。

「今度、また一緒に行こうね」

僕は何度も首を縦に振った。

商店街を抜けてしばらく歩くと、いつか夏美と共に夕日を眺めた土手に辿り着く。

付き合い始めてから二年。実はかねてから夏美に伝えたいと思っていたことがあった。ずっと言いそびれていたのだが、今日こそ伝えようと心に決めていたのだ。

「ちよつと、ここで休んでいいかない？」

「……いいけど？」

二人は土手の斜面に腰を下ろす。

どちらからともなく、遠く、ビルの上に落ちていく夕日を眺める。

「ここって、前に二人で夕日を見た場所だよな」

「うん」

夏美は遠くを見るような目で言った。

「懐かしいな。あの頃は、まだたっちゃんと付き合ってたんだよね」

「そうだね」

すると、夏美の表情に影が差す。

「実はあの時、色々あって真剣にお弁当屋を辞めようかと思って悩んでいたの。でも、たっちゃんと話したおかげで、もうちよつとだけ頑張ろうって思えたんだ。だから、今でも働いてるの、たっちゃんのおかげなんだよ？」

「そうだったんだ」

化粧は薄く、アクセサリーなんてまったく身に着けていないけれど、夕日に照らされ、微笑するその姿はまるで御伽噺に出てくる妖精のように美しかった。

そんな美しいけれどどこか儚げな夏美は、ある日、ふっと僕の前から消えてしまうのではないか。

そう思うだけで、いてもたってもいられない程の焦燥感にかられ

る。だから、今すぐにも僕のいる場所に繋ぎ止めておかないと。

「本当に、たっちゃんにはいつも励まされてばかりだよ」

「そんな……僕こそ、夏美にはいつも元気を貰ってるよ」

「そう、なの？」

「うん……」

そこで会話が途切れた。

お互い照れているのか、それとも夕日のせいなのか、二人は顔を赤く染めて空を眺めていた。

言うなら、今しかない。

「あのさ」

二人はほぼ同時に沈黙を破る。

「そっちから先にどうぞ」

またしてもセリフがかぶった。その偶然の出来事に驚き、お互い目を見開いて見つめ合う。

「ぷぷぷ……あはははは！」

「ふふふふふ」

僕が思わず笑い出すと、釣られるように夏美も笑い出す。

「僕達、息がぴったりだね」

「そ、そうだね」

夏美は指で目尻に浮かんだ涙を拭う。

「……あのね、こうやって、ずっと一緒に居れたらいいなって、言いたかっただけなの」

そう言つと、夏美は頬を赤らめる。その言葉を聞いた僕もゆでダコのように顔を真っ赤にした。とても付き合い始めてから二年経ち、さらに同棲してるとは思えない程の初々しさだ。

でも、そんな夏美の言葉は、煮え切らない僕の背中を押した。

「夏美、僕も君とずっと一緒にいられたらなって思う……」

「……うん」

「だから、結婚してほしい」

僕がそう言つと、夏美は大きく目を開く。そして、その瞳からこ

ばれた一筋の涙が頬を伝った。その雫は夕日を反射して、キラキラと輝き、宝石のようだ。

「……ふ、ふえええええん！」

夏美はせきを切ったように泣き出した。まるで幼子のように泣きじゃくる夏美を前にして、まずいことを言ってしまったのかと狼狽する。

「へ、変なこと言ってごめん！ 結婚なんて、まだ早かったのかな？ と、とにかく泣きやんでよ」

僕は夏美の頭に優しく手を乗せると、ゆっくりと撫でた。

「ふえ、ひつく……」

夏美の涙はまだ止まらないが、段々と落ち着いてくる。

「ごめん、変なこと言って……」

「ちがうの……そうじゃないの……」

「違うって、何が？」

「嬉しいの。……嬉しすぎて、思わず泣いちゃったの。ずっとたちちゃんと家族になりたいって思ってたから」

夏美が僕に抱きついてきた。そんな夏美を僕は壊れ物を扱うかのように抱きしめる。女の子特有の柔らかい感触が心地良い。

「よかった。僕と一緒にいるのが嫌なのかなって心配だったよ」

「そんなことあるわけないっ！ だって、あたしはたちちゃんのこと大好きだもん！」

夏美は声を荒げて言う。すると、自分で言うっておきながら恥ずかしくなったのか、夏美はさらに顔を赤らめた。

「……夏美」

「……たちちゃん」

僕と夏美はお互い見つめ合い……やがて唇を重ねる。二人の影が地面に伸びて、一つに繋がっていた。

唇で触れ合うだけの稚拙なキス。でも、今の二人にはそれで十分だった。十分にお互いの愛情を確かめ合えたから。

今日はおそらく僕の人生で最高の日だ。

世界で一番愛してる人と生まれて初めて遊園地へ行き、とても楽しかった。それ以上に夏美と本当の意味で結ばれたことが嬉しかった。今日程幸せだった日がかつて僕の人生であっただろうか。

僕達は手を繋いで帰路についた。

いつもなら他人の目を気にして、外で手を繋ぐことなんて絶対にしない。でも、今日だけは特別だった。さっき味わった幸せの余韻をもう少しだけ感じていたかったから……。

「何、今のカップル。超ウザくね？」

「うぜーうぜー！」

そんな風に露骨に嫌悪感を向けているゴロつきがいることなど、夢にも思わなかった。それだけ二人は幸せすぎて、周囲が見えていなかったのだ。

土手から住宅街に入った時だった。

物凄い勢いでやってきた車が僕達の横で急停車する。その車は大きめのバンだった。

「急に危ないな……」

僕がそう呟くと同時に車のスライド式のドアが開き、勢いよく三人の男が飛び出してくる。その内の一人が夏美の手を強く掴んだ。

「きゃあああああッ！」

呆然とことの成り行きを見守っていた僕は、夏美の悲鳴で我に返る。

「いきなり何するんだ！」

夏美のもう一方の手を強く握り、自分の方へ引き寄せた。すると、残りの二人が背後に回り、僕を羽交い絞めにする。

「いやあッ！ たっちゃん！」

夏美が無理矢理車に押し込まれていく。

「やめろッ！ 夏美を返せ！」

僕は必死に抵抗した。両手をばたつかせ、自分を押さえつけている男達の顔に何度も拳を当てる。

「ちッ……ウザってえ！」

その時、首筋にひんやりとしたものが当たった。
バチッと何かが弾けるような音がすると同時に僕の体の力が抜ける。スタンガンだと気づいた時にはもう遅く、僕の意識は完全に途絶えた。

気がつくと、仰向けに横たわっていた。
頭がぼんやりとして、思考がおぼつかない。

何かを忘れているような……。

なんだっけ……。

とても大事な、愛おしい、何か……。

「たっちゃん！」

誰かが叫ぶように自分のことを呼んだ時、意識がはっきりとした。
すると、今まで忘れていた夏美の顔が頭に浮かぶ。

「夏美ッ！」

僕は慌てて上半身を起こす。

そこは知らない場所だった。

その部屋の壁は壁紙が剥がれ、コンクリートがむき出しになっていて、床のタイルには亀裂が走っている。天井を支える何本かの柱は所々欠けていて、鉄筋が丸見えだ。ほぼ全ての窓ガラスが割れ、床にその欠片が散在していた。あちこち埃まみれで、人の手入れがまったく行き届いていない。どうやらここは朽ち果てた廃墟のようだった。

部屋の中央付近に一人の男がいて、その周囲を囲むように三人の男が立っている。そして、少し離れたところで夏美が一人の男に羽交い絞めにされていた。

「ようやくお目覚めかよ」

一人の男がそう言うと、その男の周りにいた三人の男達がにやにやしながら僕に近づいてくる。

日本人には不自然な程真っ黒に焼けた肌。顔のいたるところにつけられたピアス。均等に染まっておらず、汚らしい金色の髪。

それらのせいで一見老けているように感じるが、近くで見ると、どの男もまだあどけなさが残る少年だった。

「こんなことをして、一体僕達をどうするつもりだ!？」

僕がそう叫ぶと、先程輪の中心にいた少年　おそらくリーダー格と思われる人物が嫌らしい笑みを浮かべる。

「どうって……おにーさん達に遊んで貰おうと思つてさ」

他の少年達がどつと笑いだす。

「なっ……ふざけるなッ!」

僕が怒りをあらわにして、リーダーの少年に掴みかかるうとする
と、

「おっと、それ以上こっちに近づくなよ?　大事な彼女がどうなつても良いのか?」

リーダーの少年は夏美の方に視線を向けた。僕も釣られるようにそちらを見る。

「ひっ……た、たっちゃん……」

夏美の首筋には鈍く光るナイフが当てられていた。

「夏美には手を出すな!」

「それは、おにーさんの心がけ次第だぜ?」

リーダーの少年は唇の端を吊り上げ、邪悪な笑みを浮かべる。

「……なんで、こんなことするんだ?」

「いやさあ、オレら彼女がいない非リア充だからさ、仲良くいちゃついているリア充のあんたら見てたらさあ、イラつきちゃってさあ」

「ついカツとなつてやった、でも後悔はしていない!」

「ぎやははははッ!」

僕の問いに、少年達が各々答えた。

「どうすれば、僕達を解放してくれるんだ?」

「そうだな……お兄さんが大人しく、オレ達と遊んでくれたら帰してやるよ」

遊ぶと言つが、和気あいあいとゲームなどに興じるとはとても思えない。おそらく、一方的に暴力を振るわれるのだろう。

「……わかった。その代わり、絶対に夏美には何もしないでくれ」
「はいはい」

本当は怖かった。

強気を装っているが、さっきから足の震えが止まらない。

今まで喧嘩もろくにすることがなかった。当然、暴力なんかにはまったく慣れていない。だから、僕にとっては想像を絶する痛みがこれから襲ってくるのだ。怖くて怖くて仕方が無かった。

それでも僕が苦しい思いをすることなんてどうでもいい。でも、自分よりも大事な存在　夏美が苦しむ姿だけは絶対に見たくなかった。

「じゃあ、リア充なおにーさんに遊んで貰って、オレ達もリア充気分を味わっちゃおうか」

「へーい」

リーダーの少年がそう言うと、僕を取り囲んでいた内の一人が殴りかかってくる。頬を殴られふらついた僕を他の少年が押さえつけた。

「たっちゃん！」

夏美が悲痛な面持ちで叫ぶ。

「サンドバッグだ！」

最後に残った少年がそう言うと、僕の腹を執拗に殴りつけてくる。

「ぐッ！」

膝がかくんと曲がる。苦しくて自分の力だけでは立っていられない。

「おら、しっかり立ってるよ！」

後ろから押えている少年が力づくで僕を立てせる。

「やめてッ！　離して！　たっちゃん！　たっちゃんんん！」

夏美が涙を流して叫ぶ。

「夏美……大人しくしているんだ。大丈夫だから……」

「で、でも……」

「そうそう、彼氏の言うことはちゃんと聞くもんだぜ？　なっつみ

ちゅわ〜ん」

夏美の首筋に突きつけられているナイフに力が込められる。

「いつ……」

すると、夏美の肌にじわりと血が滲む。

「やめるッ！ 夏美には手を出すな！」

「あんた達が大人しくしてれば、なッ！」

そう言った少年が僕の腹に膝を入れる。僕の腰が曲がって頭が下
がると、さらに他の少年に頬を殴られた。口の中が切れて血が流れ
出る。

それから何度も顔面を殴られると、口の中で嫌な感触がした。ど
うやら奥歯が折れたらしい。

「げはッ！」

折れた奥歯を吐き出す。

「よっしゃ！ 歯ゲット！」

「なにい！ オレも歯ゲットしてえ！」

「悔しかったら、お前も歯ゲットしてみろよ」

「こいつうゝ。よし、オレだつて」

殴られ、蹴られ、殴られ、蹴られ……。

少年達にされるがまま、僕は耐え続ける。

やがて立っていらなくなり、床に倒れこむ。すると、三人の少

年達は僕のことを交互に踏みつけた。

初めは結構痛かったけど、もう、殆ど何も感じない。

頭がぼうつとして、視界が白みがかつていく。

僕、死んじゃうのかな……。

なんて、思っていた時だった。

「もうやめてッ！ やめて下さい！ このままじゃたっちゃんが死
んじやうッ！ お願いです……なんでも、なんでもします！ だか
ら、もうたっちゃんに暴力を振るわないでッ！」

夏美の悲痛な叫びが部屋中に木霊する。

でも、僕にはどこか遠くから聞こえてきたかのように感じた。

「おい、やめろ」

リーダーの少年の一言で、他の少年達の動きはぴたりと止まった。リーダーは夏美の前まで歩み寄ると、

「今、なんでもするって言ったよね？」

「……言いました」

「なんでもするってことはあ、なにしてもいいってことだよなあ？」

「………」

「つまり、なつみちゅわんは、たっちゃん代わりにオレ達と遊んでくれるってことだよなあ？」

「……は、はい」

夏美は離れている僕の目でもわかる程、震えていた。でも、目を見開き、しっかりと少年を睨みつけていた。

リーダーの少年はこちらに振り返ると、

「おい、お前ら。おにーさんを拘束しとけ」

「え……どうやってですか？」

「車に縄積んであっただろ？ それ持つて来い」

程無くして、下っ端の少年が持ってきた縄で僕は柱に拘束される。満身創痍の僕は抵抗など出来なかった。

リーダー以外の少年達に夏美が囲まれる。すると、先程までとはがらりと雰囲気が変わった。夏美を見る目が違う。全員、頬を赤らめ、発情した雄犬のように息を荒げていた。

「……よく見ると、結構可愛い顔してますね」

「そ、そうだな……」

「やっぱ、女だし……やっちゃっていいんすよね？」

すると、リーダーの少年が、

「なつみちゅわんがいつて言ったから、いいんじゃないの」

なんとも投げやりに言う。

どうもこのリーダーの少年はどこか他の少年達とは違う。なんとなくか、温度差があるのだ。他の少年達はみなその容姿に見合った性格で、まるで動物のように本能だけで生きていると言わんばかり

にその思考は至って単純な気がする。しかし、リーダーの少年だけはよくわからない。先程のリンチにもまったく関わってこなかった。この場において、一体何を利益と捉えているのだろうか。

「で、でも……流石にこれはマズくないっすか？」

この中でも特に若い、下っ端が言う。

「ああん？ 今更何怖気づいてるんだよ。拉致っておにーさんと遊んじゃってる時点で十分マズいんだよ。頭悪いくせに余計な心配してんじゃねえ！」

「う……す、すみません……」

リーダーの罵声を浴びると、下っ端は縮み上がる。

この少年達は一見無秩序な荒くれ者の集まりだが、完全にリーダーが指揮系統を掌握している、統制のとれた集団だ。リーダーの意思は絶対で、他の少年達は決して逆らえない。

「暴れられたら厄介だ。先に手足潰しとけ」

リーダーがそう言うのと、少年二人が夏美の両腕を押さえつける。

「いやあああああああッ！」

骨の折れる、不快な音が部屋に響く。あまりのえぐい音と感触に、さすがの少年達でも顔を引きつらせている。

でも、そんな中でただ一人だけとても楽しそうな人間がいた。

リーダーだ。リーダーは恍惚とした表情を浮かべていた。先程、僕が殴られている際は気づかなかったが、おそらく、この少年は今と同じような顔をしながら見ていたのだろう。他人の顔が苦痛に歪むのが大好きな根っからのサディスト。残忍で冷酷な悪魔のような人間。

夏美の泣き叫ぶ声が僕の耳に入ってくる。その度に、僕の心はずきりと痛む。でも、体の感覚が麻痺して動けない。悔しいけれど、どこか別世界のことのような気持ちで見つめていた。

「なっ……み……」

目の前には地獄の光景が広がっている。

夏美に覆いかぶさる四人の少年達。

そして、それを離れた場所から見て、笑っている少年。

残酷にも、僕の意識は回復していた。

夏美に群がる少年達は、まるで地獄に住まうという餓鬼のようだ。その餓鬼共に夏美が、僕の大好きな夏美が、目の前で苦痛を強いられ、貪られるように全てを奪い取られていく。

リーダーの少年が僕の方に視線を向けると、目を輝かせた。

「おい、見るよ。こいつ、勃起してるぜ！」

そう言われて初めて気づいた。

確かに僕の股間は痛々しいくらいに膨張し、ズボンを押し上げていた。

「自分の女が犯されてるのを見て勃起するなんて、こいつ変態じゃねえの？」

「ひよつとして、噂のネトラレ属性つてやつ？」

「それとも、こいつも混ざりたいんじゃないの？」

「えー、流石にもう無理だろ」

「あははは！ 残念でした。おにーさんはそこから見ててね」
悔しかった。

少年達への怒りと羞恥心がぐちゃぐちゃになっていた。

許せない。

絶対に許すことは出来ない。

憎い。

憎くて憎くて仕方が無い。

だから、こいつを殺さないと……。

後悔の矛先？

気づいたら、僕の下腹部からは血が流れ出ていた。

ちよつと不思議だ。

僕はもうこんな化け物なのに、体の中にはまだ人と同じ赤い血が流れているんだな。

それにしても、目の前にいるこの人は、ずっと手ぶらだったはずだ。なのにこれはどういうことなんだろうか。さっきは無意識にやっていたけど、僕は体中に生えている毛を自由に動かすことが出来る。おそらく、この人の刃もそういった類の能力なのかもしれない。そんなことを考えていると、目の前の怪人は僕に突き刺した黒い剣のような刃を上段から振り下ろしてくる。僕は咄嗟に頭を庇いながら後方に飛びのくが、左腕をざつくりと斬られた。傷口から勢い良く血が吹き出る。たぶん、動脈が切れたのだ。でも、一体なんでこの人は僕にこんな酷いことをしてくるんだろう。

僕はただ、夏美の仇を討ちただけなのに……。

下腹部と左腕が物凄く痛い。しかも傷口から止め処なく血が流れ出ているせいか、頭がくらくらし、まともに立ってられない。とうとう重力に逆らえず、両膝を地面につく。

怪人はそんな僕の側頭部に容赦無く回し蹴りを叩き込んだ。口の中に溜まっていた血液を吐き出しながら、地面に倒れこむ。

こんなの理不尽だ。

僕は何も悪いことなんてしていない。

なんで、この人はわかってくれないんだ！

「ボ……ボゴオバ……ガブウ！」

どうやらもう、僕の発声器官ではまともに人語を操れないらしい。何度も僕の思いを言葉にしようとするが、上手く発音することが出来ない。

「……………」

そんな僕を怪人は、無言で見つめていた。 僕のことを待つてくれているのか？

「……ボグハ、ダダ、ナツミノ、仇ヲ、ウチダイ、ダゲナノニツ！」
必死に腹の底から搾り出すようにして、ようやく僕の気持ちを言葉に出来た。

僕は正しいことをしている。

悪魔のような少年達によって、何の罪も無い夏美の心と体は汚されてしまった。それなのに、社会は悪童共に何の罰も与えなかった。だから……、だから、僕が罰を与えてやるんだッ！

「……それは、嘘だろう」

しかし、怪人は僕のそんな思いをきっぱりと否定した。

「ナツミヲ、犯シテ、自殺ニ、追イコンダノハ、アイツラナンド！」

だから、復讐してやるんだッ！

そう言おうとしたが、もうこれ以上喋ることは出来なかった。声を出そうとしても、もう唸ることしか出来ない。もう人間じゃない僕が、少しでも喋れたのは奇跡だったんだ。

「太田夏美を死なせたのは、あのガキ共じゃないさ」

ふざけるなッ！

あいつらが僕の夏美を死に追いやったんだ！

何も知らないくせに、適当なことを言うな！

「があああああああああああああああああああああッ！」

僕は重症を負っている体に障るのもお構いなしに、絶叫した。

怪人はそんな僕をただじっと見つめている。

何故だろう。

表情は仮面に覆われていてまったくわからないはずなのに、その視線にはひどく責められているように感じた。

気づいたら、体が震えていた。

そして、胸が妙な違和感で締め付けられている。

僕は初めてこの人と遭った時に感じた恐怖を再び味わっていた。

たぶん、この人の言葉が僕の心を捕らえて離さなかったから……。

「太田夏美を死なせたのは…… お前だよ、白井達也」

あの忌まわしい事件から一年が経っていた。

最初の頃は事情聴取やら裁判やらで心休まる暇がなかったけれど、裁判に負けてからというもの、僕と夏美はなるべく他人と関わらないようにひっそりと生活していた。

あの日以来、夏美は感情を失っていた。以前は野に咲くたんぽぽのように微笑んでいたのに、今では眉一つ動かさない。言葉もろくに発しなくなっただし、いつもどこか虚ろな目をしている。きっと、あまりの出来事に心が壊れてしまったんだろう。

少年達に折られた四肢は完治せず、また、強姦されている最中に何度も頭を強打したため障害が残って、夏美はまともに体を動かさなくなっただ。そのため、外出することはおろか、食事や入浴すらも一人では出来ない。

夏美は一日中部屋の中にいて、窓際にぽつんと座って外を眺めていた。色々と喋りかけてはみるものの、まともな反応が返ってきた試しがない。これじゃあただの人形と同じだ。僕はそんな夏美を見ているのが辛くて仕方が無かった。

以前の夏美に戻って欲しくて、僕は必死に努力した。この辺りで一番評判の良い病院に通わせだし、夏美の症状のことも勉強した。家事は勿論のこと、一人で何も出来なくなっただ夏美の世話も焼いた。生活費や治療費を稼ぐために一生懸命働いた。怪しいと知りつつもわらにもすがる思いで新興宗教のようなものにも手を出した。

それでも、夏美は元に戻らなかった。

こんなに努力しているのに、何故昔の夏美に戻ってくれないんだ。

僕はもう限界だった。

ある日のことだ。

仕事を終えて帰宅すると、夏美が倒れていた。

「 なつ、み? 」

頭の中が真っ白になった。体から力が抜けて、持っていた鞆を落とす。

なんとか我に返ると、夏美に駆け寄る。

「夏美! 何があっただんだ? 」

そこで、気づく。

床には大量の薬の入れ物が散らばっていた。それは夏美が通っている病院で処方されていた睡眠薬のものだった。

「まさか、これ全部飲んで……? 」

おそらく、この大量の睡眠薬は、自殺するためにこつこつと貯めていたのだろう。

「そ、そうだ…… きゅうきゅうしゃ……」

僕は震える指で電話を使い、救急車を呼んだ。

……でも、間に合わなかった。

夏美の意識は二度と戻らなかったのだ。

本当に間に合わなかったのか?

誰かが言った。

お前は夏美の最期の言葉を聞いたはずだ。

そんなことはない! 確かに僕が帰宅した時はすでに死んでいたんだ!

思い出せ。

嫌だ……。

思い出すんだ。あの日のことを……。

嫌だ……思い出したくない……。

向き合うんだ。己が過ちと……。

あ

ッ！

すぐに救急車はきた。

夏美はやってきた救急隊員によって速やかに救急車に乗せられる。最後に僕も乗り込んだ。

病院へと搬送される間、救急隊員の手で夏美に蘇生術が施される。戻ってきてくれ……夏美ッ！」

僕は両手を額の前で組み、ただ祈り続けた。

「……………」？

その甲斐あつてか、程無くして、夏美が目を覚ます。

「夏美ッ！」

だが、夏美は虫の息だった。意識が朦朧としているようで、焦点が定かではない。

「夏美……どうして……？」

夏美の安否を気遣うよりも先に、そんな疑問を口にしていた。でも、理由など聞くまでもない。あの少年達の顔を思い浮かべた。僕の中にどす黒い怒りがこみ上げてくる。

しかし、次の夏美の言葉はそんな僕の考えとは違っていた。

「ごめんね……、たちちゃんの優しさに、耐えられなかった」

かすれた声でそう呟くと、夏美は静かに目を閉じた。

どういうことだ？

「なつみ……？」

“ たっちゃんの優しさに、耐えられなかった ”

「 なんだよ…… 意味がわからないよ…… どういうことだよ…… 夏美…… 起きてよ夏美…… 」

僕は夏美の体を揺さぶる。だが、夏美はもう何の反応もしない。

「 意識レベル低下 」

「 どいてくださいッ! 」

僕は答えを得られないまま、夏美から無理矢理引き離される。

「 答えてくれよ! なつみいいいいいいいいッ! 」

息が続く限り、夏美の名前を叫び続けた。でも、二度と彼女が目を覚ますことはなかった。

僕の夏美への愛情は、あの事件以来、同情や罪悪感といった類のものへと変わった。

変わり果ててしまった夏美を見る度にあの時のことが鮮明に思い出される。その度に胸が引き裂かれる思いだった。

目の前にいながら夏美を救えなかった自分。大好きな人が陵辱されているのを目の当たりにして、欲情してしまった自分。そんな弱くて汚らしい自分を許すことが出来なかった。

夏美はそんな僕の罪を映し出す鏡だったのだ。

そしてその罪を消そうと懸命にもがいていた。 夏美の気持ち

などおかまいなしに。

それこそが、僕の本当の罪だった。

その罪は夏美が死ぬことによって、永遠に償うことが叶わなかった。そんな行き場のない後悔は怒りへと変換され、あの少年達に向けられたのだ。

わかっていた。

本当はわかっていたんだ。

夏美を精神的に追いつめたのは僕自身だって……! !

でも、それを認めてしまうと、狂ってしまいそうだった!

誰かのせいになければ僕の心は保てなかったんだ！
だから仕方なかったんだ！

……だけど、結局は狂ってしまった。

僕の体は心に合わせて歪んでいき……僕は僕でなくなってしまうのだ。

「あああああああああああああああああッ！」

全てを思い出した僕は、叫んでいた。

それと共に僕に残ったわずかな人間性は失われていく。

もう……何も考えられない。

絶叫する白井達也を目の当たりにして悟る。ヤツは完全に人を捨てた。もう、躊躇う必要はない。

俺は膝を曲げて腰を落とし、前屈みになり、右脚に意識を集中させた。

白井達也はそんな俺を見て何かを察したのだろう。ふらつきながらも立ち上がると、腕をこちらに向け、体毛を伸ばしてきた。

だが、俺に何度も同じ手は通じない。

真横に飛び、それをかわす。体毛は直角に向きを変えて、いまだ地に足をつかない俺を追跡してくる。腕を捕らえられるといった瞬間　俺は着地すると同時にヤツに向かって跳躍した。

重力の影響を受けて落下し始めると、左足を折り、右足をヤツに向かって突き出す。すると、俺の右足は無数の刃で瞬時に覆われた。白井達也はそんな俺を呆然と見上げている。自分の傷ついた体でもはや避けることは出来ないと言わんと踏んで、迎撃するつもりだろう。

飛んだ時の勢いと、重力加速が合わさって、ハヤブサが急降下する時程の高速で落下していく。白井達也は身構え、迎え撃つ体勢を

とった。

二人の距離はあつと言う間に縮まっていく。

お互いの体が接触するといった瞬間、白井達也はタイミングを合わせて手刀を繰り出す。

「!?」

「ぐぶッ……」

白井達也の手刀は俺の頬をかすめ……、俺の右足はヤツの心臓部分をとらえて、刺し貫いていた。

左足で白井達也の肩を蹴って、右足を引き抜き離れると、右足から生えた刃が引っ込んだ。

白井達也は膝について、こちらを見た。俺もそれに応えるかのように視線を向ける。

下半身から徐々に、白井達也の体は闇夜に溶けるように黒く染まっていく。

……やがて全身が闇色に変わると、白井達也の体は崩壊し、蒸発した。

皿を洗う。

相変わらず昼食時の“アン・ドン・ジュアン”は繁盛している。だから、俺もマスターも大忙しだ。

そんな中、来客を知らせる鈴が鳴る。

「おーっす！ 報酬、貰い受けに来たぞ！」

やってきたのは冬子だった。

冬子はカウンター席に我が物顔で腰を下ろすと、

「一番良いランチを頼む」

と、やたら偉そうに言う。

「マスター。Aランチ一つ」

「はああああ？ わたしは確かに“一番良いランチ”って言ったよね？ この店で一番値段の高いランチは？」

「……スペシャルランチだ」

「そう。じゃあそれお願いね」

「……仕方ない」

マスターに伝票を渡すと、皿洗いに戻る。

しばらくすると、客足が途絶えた。時計を見ると十四時。今日も無事昼を乗り切ったようだ。洗物もあらかた終わって手が空くと、冬子が話しかけてくる。

「警察は白井達也を重要参考人として指名手配しているみたいだね」それは当然だろう。何故なら、殺された五人の少年全員に対する、明確な動機を持っていたからだ。

「まあ、事件の背景を知っているわたし達にとっては今更ってカンジだけど。白井達也と少年達の繋がりを世間に公表することは難しかったからね」

白井達也を公式に指名手配するということは、未来ある少年達の前科を公にしまうことだ。それゆえに公開捜査に踏み切ることが躊躇われた。その結果捜査が遅れ、結局少年達は全員殺された。今回ばかりは、死んだ少年達は“不幸にも”未成年だったってことか。

「あと、まだ葵には言ってなかったけど、実は白井達也と太田夏美は二人共孤児で、天涯孤独の身みたいなの」

それは初耳だ。

「だから、あの二人にはきつとお互いしかいなかったんだろうね。そんな大事な人が目の前で酷い目にあったらって思うと、胸が引き裂かれたみたいに苦しくなるよ……」

冬子は手元のカップを眺めながら言った。

その気持ちは俺にもわかる。

俺にもかつて、そんな女がいたから……。

もし、白井達也が少年達に復讐を遂げた後、人に戻り、殺人をやめていたら、俺はあいつを殺さなかった。あの少年達はそれだけのことをしたと思うから……。でも、結局あいつは闇に心をとらわれ、無関係な人間をも殺してしまった。あのまま放っておいたら、あい

つはひたすら人間を殺し続けただろう。だから、やるしかなかったのだ。

「ねえ、白井達也は今どこにいるんだろうね？ わたしとしてはこのまま捕まらずに逃げ切つて欲しいんだけど。葵、あんた何か知ってるんじゃない？」

「さあな……」

あいつは今どこにいるんだろうな。

闇にとらわれた人間の肉体は、死ぬと闇となって消えてしまう。

でも、その魂はどこへ行くのだろうか？

白井達也の最期を思い出す。

俺はトドメの一撃を放つ際に反撃を受けて、多少怪我を負うことは覚悟していた。だが、あいつは“あえて最期の一撃を外した”。きつと、あいつもわかっていたんだ……自分が間違っているってそれゆえに、あいつは俺の一撃を受け入れ、死ぬことを選んだ。

だから、あいつの罪は許されても良いはずだ。許されて、太田夏美と同じところへ行つても良いはずなんだ。それくらい世界は優しくても良いはずなんだ。

「もう、またそうやってはぐらかす！ そろそろ、あんたは何者で、何をしているのか教えてくれないんじゃないの？」

「う……」

俺は嘘をついたり、誤魔化したりするのは正直苦手だ。だから、こういう時どうしたら良いのかわからない。

冬子につめ寄られ、窮地に立たされる。顔を引きつらせながらも必死に頭を回すが、上手い言い訳が思いつかない。

そんな時、店内に鈴の音が響く。俺にとってはまさに救いの音だった。

「あ、客が来たから行つて来るな！」

俺は素早くメニューを取ると、そそくさと来店したばかりの客のところへ向かう。

「んもうつ！」

冬子は悔しそうに頬を膨らませ、地団駄を踏む。

「まあまあ、これ飲んで落ち着いて頂戴」

マスターはそう言っていると、冬子の前にコーヒークップを置く。冬子は眉間にしわを寄せながら、カップに口をつけてコーヒーを飲む。すると、表情が緩んでいく。

「美味しい。やっぱりマスターのコーヒーは最高ですね」

「うふふ、おだてても何も出ないわよん」

そこで、冬子のはつとなつて手を叩く。

「あ、そういえば。前から気になってたんですが、マスターってぶつちやけオカマですよな？」

「あら、随分ストレートに言うのね」

「違うんですか？」

「肉体は男で心は女だから、世間一般ではオカマって言つのかしらね」

推定身長約百九十センチの筋骨隆々な肉体をクネらせ、マスターは言った。

「じゃあ、やっぱり、男の人が好きなんですか？」

「ふふふ……どうかしらね」

そう言つと、マスターは何故か俺の方を見た。冬子も釣られるようにこちらに視線を向ける。なんだか酷く寒気がした。

「やっぱり、マスターはホモってことか」

「冬子ちゃん、それは違うわよ。アタシは“ホモ”じゃなくて“ゲイ”なのよ。そのところ間違えないで頂戴」

冬子はホモとゲイの違いがよくわからなかったのか、首を傾げた。

後悔の矛先 - - - - - END

疑惑の代償？

何かを叩く音がした。

「……育て方が……っっているんだ！」

「……だって、……でろくに家庭を……くせにッ！」

また、何かを叩く音がした。

大きな音がする度にわたしの身はびくりと震える。

夜中、パパが仕事から帰宅すると、パパとママが喧嘩をするのは日常茶飯事だった。

その殆どの原因はわたし。

わたしの成績が悪いとか、成長が遅いだとか、そんなことをいつも言い争っている。

二人は一応配慮しているつもりなのか、夜中の喧嘩をわたしが知らないと思っているらしい。でも、わたしはいつも二人の戦場である居間とドア一枚しか隔たれていない玄関前の階段に座り、その様子を伺っていた。

「……ができそこないなのは……せいだッ！」

「……せいよッ！」

わたしの名前がでてくる度に胸が締め付けられるように痛い。自然と目尻に涙が溜まる。ここから消えてしまえばどんなに楽だろうか、と思う。

低学年の頃までは良かった。

他の子達と成績や体格に差はなかったから、両親がわたしのことで喧嘩することなんてなかった。

でも、今はことあるごとにママが出来の良い子と比べてはそれが火種となり、喧嘩が起こる。

パパは仕事仕事であり家庭を顧みなかった。朝は早いし帰りは遅い。休日もろくに家にいない。だから、滅多に顔を合わせることもなかった。

問題はママだ。余所の子の活躍がよほど腹立たしいらしい。何か外で自慢されてくる度にわたしに怒りをぶちまけてくる。

そんなだから家は窮屈で、居心地が悪かった。

かといって、学校が楽しいかと言われれば、そうでもない。

かつては友達がいっぱいいて、毎日が楽しかったけれど、今では誰もわたしに寄り付かなくなった。たぶん、前に比べるとわたしは根暗になったから、一緒にいてもつまらなくなったのだろう。

中学が上がっても、わたしは孤独だった。

休み時間はずっと自分の席に座り、本を読んですぐす。

クラスメイト達が他愛も無い話題で盛り上がっているのを横目で見ていても、何がそんなに楽しいのか理解出来ない。あいつらみんな下らない、低俗なやつら。

……なんて。

そんなのは言い訳だ。

強がっているだけで、本当はそんな彼らが羨ましかった。

何度も彼らに混ざろうとした。でも、出来なかった。友達と

普通に話す方法、忘れていたから。

一方、家庭の方は落ち着いていた。

夜中にわたしのことで両親が喧嘩をすることはなくなったのだ。

でも、その代わりパパとママはまったく話さなくなった。一応、

パパの稼ぎで生活しているから、ママはパパの分も食事を作ったし、洗濯もした。けれど、食事をする時は別々だし、お互いが見えていないかのように無視し合った。まるで共同生活しているだけの赤の他人みたいだった。

家のことで感情が波立つことはなくなったが、わたしの心は凍りついていった。

結局、特に誰とも接しないまま、中学を卒業する。

きつと、誰もわたしのことなんて覚えていない。そう思うと、胸が苦しくなって、涙がこぼれた。

他にやることもなくて毎日勉強ばかりしていたから、高校受験で

は見事花開き、家から少し離れた名門女子校に進学することとなった。

これは、チャンスかもしれない。

昔のわたしを誰も知らない。だから今までの自分を捨てて、新しい自分になれる。

沢山じゃなくて良い。たった一人だけで良い。

心を許せる、本当の友達が欲しい。

わたしは、仄かな希望を胸に抱き、新しい学びや 聖城女学院の門をくぐった。

バイクを走らせていた。

アクセルを回し、速度制限標識に書かれている速度ぎりぎりまでスピードを出す。

焦っていた。

バイト二日目で遅刻はまずい。とにかく急がなければ。

ところが五十日だからか、車両がやけに多い。だが、こいつらに合わせてちんたら走っているわけにはいかない。わずかに速度を落とし、車両と車両の間を流れるようにすり抜けていく。

途中で曲がり、住宅街に入る。先程まで走っていた車道とは打って変わって、自転車すら走っていない。

俺は少しだけ速度を上げる。

しばらく走ると、聖城女学院とかいう名門女子校に通うお嬢様達の通学路に差し掛かるが、とくに一時限目の授業が始まっている時間だから、誰も歩いてはいないだろう。

それにしても寒い。

一月の冷気が高速で走る俺の肌に痛いくらいに突き刺さってくる。季節は冬真っ盛りなのに、迂闊にもコートを忘れてしまった。だからあまりにも寒くて、さっきから体ががたと震え、鳥肌が立

っていた。

それもこれも全部目覚まし時計が鳴らなかったせいだ。

実は俺が目を覚ました時、時計が何者かによって破壊されていたのだ。時計は何か強い力で叩き潰されていた。おそらく、昨夜何者かが部屋に侵入して時計を壊したのだろう。俺は例え眠っていたとしても自分のテリトリーに侵入者がいたら、その気配を察知し、すぐに目を覚ますはずだ。それなのにまるで反応出来なかった。きつと賊はかなりのでだれで、気配を完全に消して侵入してきたのだろう。

だが、不可解なことがある。賊が侵入したというのに被害にあったのが時計だけだったのだ。金目の物はまったく減っていなかったし、“右手が少し赤くなっていた”が、俺の体には特に異常はなかった。

一体、犯人はどんなヤツなのだろうか。

なんてことを考えていると、

「まずッ!？」

不意に何かが視界に入ってきた。

反射的にブレーキをかけて、ハンドルを切った。バイクの進路は変わったが、車体が急激に傾いたため、俺の体は投げ出されてしまった。硬いアスファルトの地面に叩きつけられたうえに、かなりの速度で走っていたため、勢いよく地面を転がる。

「ぐ……いてえ……」

体の回転が止まると、俺は上体を起こした。体のあちこちが痛んだが、骨に異常はなさそうだ。まあ、俺は普通の人間とは違うから、多少怪我をしても問題ないが。

問題はその後だ。

俺は恐る恐る先程視界に入っただけを確認する。俺の視線の先で聖城女学院の制服に身を包んだ少女が尻餅をついて呆然としていた。その女はふわっとしたややクセのある錆びた茶色の髪を肩辺りまで伸ばし、猫のようなパッチリとした二重の目に綺麗な鳶色の瞳、

ルージユを引いたように赤みがかった薄い唇の、高校生にしてはや大人びた印象を受けるスレンダーな美少女だった。

「大丈夫ですか？」

俺が駆け寄って尋ねると、少女は何事もなかったかのように立ち上がり、スカートについた汚れを払った。どうやら問題ないということらしい。

「どうもすみませんでした……」

「……………」

ヘルメットを取ると、軽く頭を下げた。だが、少女はそんな俺を無表情で見つめ返してくるだけだ。

何も言ってこないけど、目が俺を責めている。

「ははははは……それじゃ、失礼しますね」

バイト云々は最早どうでも良かった。ただ一刻も早くこの気まずい雰囲気の中から逃れたかった。

少女の様子を横目で伺いながら、飛んでいったバイクのもとに駆け寄る。

悲惨なことにバイクは電柱に激突し、大破していた。俺の体と違って、あちこち酷い状態になっている。これはもう、走らせることは出来ない……押していくしかなさそうだ。

バイクを起こすと、背中に少女の視線を感じながらも、ゆっくりと歩き出す。壊れたバイクはなかなかスムーズに動いてくれない。重い車体に力を込めて押す度に、その反発で体がずきずきと痛む。亀の歩みで前進する俺の背中を飽きずに見つめ続ける少女の視線が痛い。もう苦笑するしかなかった。

その後、大幅に遅れてようやくバイト先である喫茶店“アン・ドン・ジュアン”に辿り着いた。

幸いにも少女に怪我は無かったから、訴えられたりするようなことはないだろう。だけど、バイクは見事に壊れたし、バイトには遅刻してしまった。こんなことなら安全運転でゆっくりくれば良かったな。

「すみません、おくれまし」

“アン・ドン・ジユアン”に入ると、マスターが目を瞑り、仁王立ちして待ち構えていた。

「……………」

「あの、マスター……？」

俺が顔を覗きこむと、マスターの目がくわつと開かれる。眉間には深いシワが寄り、こめかみにはくつきりと青筋が立っていた。目は釣りあがり、真っ赤に充血している。その形相は、まさに修羅。

俺は戦慄した。

昨日のバイト初日の時点では、無駄に体がでかくて少々セクハラまがいのことをしてくるが、温厚な人物だと思っていた。が、それは鬼のような本性を覆い隠す仮面だったのかもしれない。

それから、俺は開店の時間ぎりぎりまで、マスターに地獄の底から響いてくるかのようなドスの利いた声で散々叱られたのだった。もう二度と、遅刻するまいと心に誓った。

夕日に照らされた下界を見下ろす。

帰宅する生徒達が校舎から校門に向かって列を作っているかのようになっている。門を越えた生徒達は、車道と学校の敷地を囲む堀に挟まれた歩道を歩く者と、校門前の横断歩道を渡り、反対側の歩道を歩く者とに別れた。一方、校庭では体操服を着た生徒達が列を作って走り回っていた。おそらく陸上部員だろう。

わたしはそんな彼女達を見ていると、いつも蟻の大群を連想する。小学生の頃、遊んでくれる友達が誰もいなくて教室に居辛かったから、グラウンドの片隅で独り無意味に蟻の列を乱して暇を潰していた。石などの障害物を置いてみたり、水を流して川を作ってみた。りして蟻の進路を妨害するのだ。けれど、蟻の列は止まらず、ただ巢穴を目指して行進し続ける。

思い通りにならない蟻達に苛立ちを覚えたわたしは、巣穴に直接水を流し込み、入り口を泥で塞いだ。それには流石の蟻達もたどるたえるばかりだった。その様子を見て、わたしはまるで自分が神のような存在になったかのように感じ、満足したものだ。

わたしはこんな風に学校の屋上から下を見下ろすのが好きだった。何故なら、かつてわたしが蟻にしていたように、自分の気分次第で地を這う彼女達をどうしても出来るような気分を味わえるからだ。

でも、そうやって空想するだけで我慢していたのは昔の話。今のわたしならその空想を現実に出来る。わたしはその力を持っているから。

でも、いくら力があると言っても、かつて蟻にしたように容易くはない。頭を使って入念な計画を立て、それを労力を使って実行しなければならぬのだ。

再び視線を下ろすと、すでに生徒達の姿は無かった。わたしがぼんやりと考えごとをしている間に結構な時間が経ってしまったらしい。

誰もいない学校前の歩道を見つめっていると、遠くから一人の男性がやってきた。その人はズボンのポケットに手をつ込んで、肩をいからせて歩いている。

わたしはその人物に見覚えがあった。今朝、バイク事故を起こした人だ。彼自身には大した怪我は無かったようだけど、電柱に激突したバイクは素人目でもわかるくらいに壊れていた。それはこうして今、朝来た道を徒歩で帰っていることから明らかだ。

そのことを知っているからか、ただ歩いているだけなのになんだか酷く苛立っているようにも見えた。いくら異常に目が良くなったわたしでも、ここからでは細かい表情までは読み取れないというのに。

しかし何故だろう。

妙に彼のが気になった。

これって、ひょっとして恋？

……まさかね。わたしは一目惚れをするようなおめでたい少女趣味は持ち合わせていない。確かに、結構良い男だったことは認めるけど。

なんて頭で否定しながらも目で追い続けていると、ふと、彼がこちらに顔を向け、わたしのことを見た。いや、気のせいだろう。この校舎からあの道までの距離じゃ“普通の人間”ではこちらに気づくことは出来ないはずだ。

わたしって、案外自意識過剰なのかな……。

彼が道を曲がってその姿が見えなくなると、わたしは体の向きを変え、屋上を囲うフェンスに寄りかかる。

空は殆ど闇に覆われていて、程無く夜がやってこようとしていた。

そろそろ約束の時間だ。

わたしは屋上の入り口に向かって歩き出した。

校舎の中は闇に覆われていた。

この時間、部活をやっていた生徒達はすでに帰宅し、職員室なんかには残業している教師がいるが、ここ教室棟にはまず誰もいない。世間では“お嬢様学校”と呼ばれているくらいだから勿論警備員はいるが、こんな中途半端な時間に見回りはしないだろう。それゆえに電気はまったく点いておらず、日の光も殆ど差し込んでこないため、辺りは真つ暗だった。

静寂に包まれた世界に自分の立てる足音だけが響き渡る。

しばらく歩くと、廊下の一番奥にある教室のドアの前で立ち止まった。そこはだいぶ前から使われていない空き教室だ。

引き戸になっているドアを開くと、そこには現実離れた光景があった。壁や天井に張り巡らされた白い糸が網目状になって部屋中に広がっている。そして、その所々に同じ糸で四肢や胴体を拘束された少女達が張り付いていた。まさに、蜘蛛の巣にかかった虫のよう。

そう、ここはわたしの巣。

そして、彼女達はその巣にかかったわたしの獲物。

獲物の一人に近づいて、その頬を撫でる。獲物は眉をしかめて、「うつん」と唸った。虫の息だけど、まだ生きている。

わたしはくすりと笑って、彼女達を舐めるように見回した。

この糸は生物を拘束し、徐々に生気を吸い取り、やがて死に至らしめる。最初の頃に捕らえた獲物のいくつかはすでに干乾びて死んでいた。まだ生きている獲物達も捕らえた頃に比べると、明らかに痩せ衰えている。

おかしかった。

わたしを馬鹿にし、いいように利用したヤツらがこうやってなすすべもなく死んでいく。

命を弄ばれて死んでいくのはどう？

お前達が弄んだこのわたしに！

さて、そろそろ次の獲物を狩りに行かなくては。今日、狩場である学校に呼び出しておいた愚かな人間にたつぷりと恐怖を与えてから動きを封じて、じわじわと殺してあげなければ。

わたしは踵を返し、巣から出る。そして、次なる獲物と待ち合わせている自分の教室へと向かう。

教室のドアを開けると、中でずっとわたしを待っていたであろう人影がこちらに振り向いた。

「……英子？」

電気の点いていない真つ暗な教室では、例えば目が慣れていたとしても、この距離では個人を識別することは無理だろう。当然、この少女にもわたしが誰だかわかっていないようだ。もっとも、わたしには少女の期待と不安が入り混じった表情が見て取れるけど。

「違うわ」

そう答えると、少女はわたしが待ち人でないと知り、がつくりと肩を落とした。でも、声からわたしが誰だかわかったのだろう。少女は態度を急変させる。

「もう、超ウザいんだけど！ 紛らわしいからこんな時に来ないで

くんない？」

少女は声を荒げて言うと、腕を組み、そっぽを向いた。わたしになんか構っている暇はないとも言いたげだ。

困るんだよ、もっとわたしに注目してくれないと……。

「でも、わたしは英子じゃないけれど、あなたの待ち人ではあるわ」その一言を耳にすると、少女はぎょっとしてこちらに振り向いた。「実はあなたのことをここに呼び出したのは、このわたしなの」

少女は呆氣に取られている。

「で、でも、確かに英子の携帯からのメールだったのに……」

慌てて自分の携帯を取り出して見る少女。受け取ったメールの送信アドレスでも確認しているのだろう。

考える暇なんて与えてあげない。

「わたしは英子の居場所を知っているわ。 ついてきて」

そう言つと、わたしは教室を後にした。怪訝な表情を浮かべながらも少女は早足でついてくる。

二つの足音が廊下に響く。二人共、学校指定の上履きを履いているため、殆ど同じ音だけど、わたしにはまったく違って聞こえていた。狩る者と狩られる者の足音だ。この獲物はすでにわたしの罠にはまっている。一步、また一步とわたしの巣穴へと近づいているというのに、少女はまったく気づいていない。訝りながらも、消息を絶っている無二の親友にまた会えるという淡い期待で胸がいっぱいなのだ。

とうとうわたしの巣に辿り着いた。わたしは巣穴である空き教室の前に立つと、少女に振り返り、ドアに向かって顎をしゃくった。

少女は緊張した面持ちで引き戸を開く。

「……え？」

少女はあまりの光景に絶句していた。口を大きく開け、目を見開き、固まる。

その反応は当然だ。何人もの少女達が、ありえない程巨大な蜘蛛の巣にかかっているのだから。でも、この部屋を見た獲物達の殆ど

が最初にこういう反応をしたから少々見飽きている。

わたしは呆然と突っ立っている少女の背中を蹴っ飛ばし、教室の中に押し込めると、自らも入り、勢い良くドアを閉めた。

少女はドアが閉まる音に驚き、小さく悲鳴を上げると、こちらに振り向く。

「な、ななななんなのよこれはッ!？」

わたしにつめ寄る少女。どうやらまだ自分の立場をわきまえていないらしい。自分が巢に引っかけた蝶 いや、蛾かな だつてことがわからないようだ。さっきわたしが蹴り飛ばしたことで察しても良いのに。きつと、混乱していて、頭の中がぐちゃぐちゃなんだろう。

「ひっ!」

そんなことを考えていたら、自然とにやけていた。そんなわたしの顔があまりにも怖かったのだろうか。少女はびくりと肩を震わせた。

当然だ。わたしは食物連鎖でいうと、人間の上に君臨する存在なのだ。だから、獲物である彼女がわたしを恐れるのは当たり前だろう。

「ほら、そこに居るよ。あなたの大事なお友達が、ね」

わたしは巢にかかって苦悶の表情を浮かべる一人の獲物を指差した。少女はその方向にゆっくりと目を向ける。それが自分が会いたがっていた英子であると知ると、目を大きく開き、両手で口を覆った。

「英子ッ!」

少女はとらわれた友人のもとに駆け寄ると、肩を掴んで揺すりながら何度も名前を呼んだ。でも、何度名前を呼ばれても、英子は意識を取り戻すことはなかった。それでも少女は夢中でその名を叫び続ける。

わたしは持っていた携帯電話を投げ捨てた。それはかつて英子の持ち物だった携帯だ。

「……じゃあ、そろそろいいかな」

わたしがそう言うや否や、周囲に真っ黒な霧状のものが現れる。そして、それは密度を増していき、深い闇となり、わたしの体を包み込む。完全に闇に覆われたわたしの体は、メキメキと音を立てて変形していく。体が肥大化するに連れて、わたしを包む闇も大きく膨らむ。

大きく形を変えたわたしの影が、糸にとらわれ、意識を失っている英子の顔にかかった時、ようやく少女は異常に気づく。少女が振り返ると同時に闇は霧散し、変身したわたしの姿があらわになる。そんなわたしを見て、少女は今までで一番良い顔で驚いた。勿論、わたしにとっての良い顔で。

あまりの恐怖で立っていられず、尻餅をつく少女。その格好のまま、わたしを呆然と見上げている。

「……ば、ばけものッ!？」

なんともつまらない感想に、わたしは溜息を吐く。

「それだけ? ……つまらないな」

まるで、テレビなどで発言者のプライバシー保護のために変えられた声みたいだな。と、未だに慣れない自分の声を聞いて思った。

わたしは口の中に新たにできた穴の開いた器官から、糸を吐き出す。その糸は勢い良く飛んで、少女の体に巻きついた。

口から出ている糸を引きちぎり、引っ張る。すると、緩んでいた糸が緊張し、少女は直立不動の状態で横たわり、動けなくなった。

あまりの恐怖と、糸の締め付けによる痛みで少女は気を失っていた。

結局、こいつはわたしが期待していたような面白いアクションをまるでしないまま気絶しちゃったな。ほんと、いつも自分勝手なヤツ。

異常な現実から逃れ、穏やかな表情で眠っている少女を見ていると、今までわたしがこいつらにされてきた数々の仕打ちを思い出して、苛立ちを覚えた。でも、怒りの矛先である少女は、のんきに気

を失っていて、そんなわたしの気持ちなんかお構いなしだ。

……なんだか、ひどくムシヤクシヤする。

わたしは、お腹に溜まったどろどろして、熱湯のように熱いストレスを吐き出すかのように、寝転がっている少女を思い切り蹴った。蹴られた少女は「ぐっ」と呻き声を上げて、転がる。

……なんだか、気持ちがいい。

蹴る。

少女は苦悶の表情を浮かべる。

さらに蹴る。

さっきよりも強く蹴ったからか、少女は口から赤い血液を吐き出した。

蹴る。蹴る、蹴る、蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る……。

止まらない。

何度蹴つても止まらない。

蹴る度に胸がスカツとして、凄く楽しい。

「あは、あははははははははは！ ひゃーはははははははははははははは！！ タノシイ！ チョーウケル！ マジワラエル！」

蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る。……

我に返つた時にはすでに少女はボロ雑巾のようになっていた。体は赤黒く染まり、手足はあらぬ方向にひん曲がつている。折れたあばらが胸から突き出し、目、口、鼻、耳、股間といった体中の穴という穴から血液や内臓が飛び出していた。顔はぐちゃぐちゃで、最早誰だか判別することは出来ない。

「はあ、やりすぎちゃったかな……」

わたしはその場に座り込んだ。かつて少女だった肉塊から流れ出した血でお尻が汚れたけど、気にしない。だって、すでに返り血で自分の体は真っ赤に染まっているから。

夢中になつて蹴つていたから、かなり疲れた。動悸が激しいし、呼吸が乱れてる。

「はあ……はあ……あは、あはははは」

肩で息をしながらも、自然と笑っていた。

「あはははははははははははははははは……」

まるで壊れたラジカセのように乾いた声でひたすら笑い続ける。おかしかった。

今まで何をしてもあまり気持ちが晴れなかったのに、こんなことでスツキリするなんて。

しばらくすると、ぴたりと笑うのをやめた。

「あーあ、どうしよう」

せつかく新しい獲物を捕まえたのに、つい感情的になつて殺しちやつた。

「でも、気持ちよかつたな」

本当に楽しかった。

ずっとすぐに命を奪うよりも、時間をかけて死に至らしめた方が苦しみが長く続くから、復讐としてはそっちの方が良いんじゃないかと思つていた。でも、きっとそれは間違つてる。復讐は相手がいかに苦しむかというよりも、復讐をする人間の気がいかに晴れるかが問題なんだと思う。

暴力なんて、野蛮なことだと思つてた。わたしには合っていないと思つていた。でも、どうやらわたしの気が晴れる一番の方法は直接相手を嬲り、肉の感触を味わいながら、断末魔を聞くことかもしれない。

なんてことを考えている内にわたしは“人間”に戻っていた。血溜まりの中、ぼんやりと虚空を眺める。

やがてふらふらと立ち上がると、ドアを開けて廊下に出た。窓から月の光が差し込んでいる。空を見上げると、僅かに欠けた月が漆黒の空に浮かんでいた。

バイト三日目。

店がオープンしてから客の入りがピークを迎える昼までの間、まだ経験の浅い俺は、マスターから仕事を教わっていた。料理など、俺の手に負えない仕事を抜かして、もっとも厄介なのは皿洗いだった。

「それでね……お皿を洗った後はこうやって持って、こう拭くの。わかった？」

マスターは俺にもわかるように、ゆっくりと皿を拭う。勿論、今習っているのは普通の皿の洗い方ではない。素人のそれよりも清潔に、かつ素早く行なう方法だ。

「こうやって持って、こう……ですか？」

マスターに倣って拭いてみる。でも、何かが違う。

「そんなおっかなびっくりしないのっ」

どこから出しているのかわからないマスターの猫撫で声にぞくつと寒気がして、体中に鳥肌が立った。

今度は少し大胆にやってみる。やはり、マスターとは何かが違う。「それじゃあ雑過ぎるわよおん」

っん、とマスターが俺の背中を突いた。突然のスキンシップに手の力が抜けて、危うく皿を落としそうになる。

普段から家事をあまりしないから、殆ど経験の無い皿洗いに緊張しているということもあるだろう。けど、それよりもさっきからマスターの一挙手一投足が恐ろしくて、むしろそっちの方が上手く行かない原因だと思う。

バイトの面接で初めて対面した時、マスターはスーツを着こなし、とても紳士的な対応をしてきたから、まさに仕事出来る男って感じで、とても頼もしいと思った。

しかし、バイト初日。そんな幻想はマスターの姿を目の当たりにして、木っ端微塵に砕け散った。冬なのに横縞のランニングシャツ

とピンクの短パンを穿いていて、その上に“純白で、やたらとひらひらしたフリルがこれでもかというくらいについていて、胸のところにピンク色のハートマークが縫い付けられている”エプロンをしていたのだ。さらに恐ろしいことに、黒い針金みたいな頭にはこれまた純白でフリルのついたヘッドドレスをつけていた。たじろいでいた俺にマスターは「ああ、最近メイド喫茶が流行っているでしょ？ だからウチでも取り入れてみたのよ、うふふふ」なんて言うてきたのだった。

格好は言うまでもなく、喋り方、仕草、そして無駄に筋肉のついた体……。それらを目の当たりにして、俺はある仮説を立てていた。

この人、実はオカマなんじゃないか？

いや、それだけならまだ良い。ただのオカマなら人畜無害だ。そこで、俺はさらに仮説を立てる。

この人、下手したらホモなんじゃないか？

昨日の般若みたいなマスターも怖いが、今みたいなマスターも同じか、それ以上に恐ろしい。

「ひよつとして、葵ちゃんって不器用な方なの？」

俺は未だ震える手を押さえながら、「アンタのせいだろ」とツツコミそうになったが、やめておいた。

その後も練習を続けたが、全然ダメだった。何度やっても上手くいかない俺に痺れを切らしたのか、マスターは野太い声で「しゃらくせい」と言いながら俺の背中にびたりと体を密着して、手を重ねてきた。

「さ、さあ……はあはあ……アタシが手取り足取り教えてあげるから、頑張つて覚えましょうねっ！……はあはあ！」

違う。マスターはずっとこのチャンスを狙っていたんだ。

呼吸がやたらと荒いし、頬が真っ赤に染まっている。しかも目がありえないくらい血走っていた。

洗い方は自分で覚えるから早く仕事に戻ってくれ！

この気持ち悪い生物から早く逃れたいと、強く念じた時だ。来客

を知らせる鈴の音が店内に響いた。まさに、天の助けだ！

来客用のドアが閉まる音がすると同時にそちらに視線を向けると、そこにはセーラー服を着た女子高生の二人組が立っていた。

「ほら、お客様よん。席に案内してきて頂戴っ」

そう言うのと、マスターは俺の肩に軽く触れた。

なんかもう、この人はとにかく俺に触れてくるな。今のところ、一応触れても自然を装える範囲に留まっているが、このままエスカレートしていったら、最終的には……だめだ、あまりにもおぞましくてこれ以上考えたくない。

俺は首を振ってその考えを頭から追い出すと、ドアの前に立っている客に近づき、マニュアル通りの対応をする。

「いらっしやいませ、何名様でしょうか？」

そう言って客の顔を覗き込むと、知っている人物だった。

錆びた茶色の髪に鳶色の瞳の少女。昨日のお嬢様だ。そしてその隣には、長い黒髪を後ろで結び、ポニーテールにしている垂れ目の少女が立っている。

「二人です」

ポニーテールの少女が可愛らしく答えた。

店内にはあまり客がおらずがらだったので、とりあえず対応しやすいカウンター近くのテーブルに案内する。

この店のテーブルはどれも四角くて、白いテーブルクロスがかけられており、その中心に置かれている花瓶には桃色の花が活けてあった。花には疎いので、何の花かはわからない。そんなテーブルが来客用のドアから見て、右の壁に備え付けられているソファの前に四脚と、正面にあるカウンターとの間に四脚の計八脚ある。

茶髪の少女は案内された席を見ると顔をしかめ、

「わたしはこっちの方がいい」

と言うと、つかつかと歩き、カウンターから一番離れたドアに近いソファの席に座った。

「え、あ……すいません」

ポニーテールの少女はぺこりと頭を下げて、茶髪の少女の後を追う。

面倒くさいなと思いながらもカウンターの中间に戻ると、二つの透明なグラスに水を注ぎ丸いお盆の上に乗せ、メニューを脇に挟み、少女達に持っていった。

「ご注文がお決まりになりましたら、お呼び下さい」

グラスをテーブルに置き、メニューを手渡すとカウンターに戻る。しばらくすると、ポニーテールの少女が手を上げて俺を呼んだ。

今更だが、この店には従業員が俺とマスターしかいない。料理を作るのはマスターだけなので、必然的に客への応対は俺ということになる。

伝票を取ると、少女達の座る席に向かう。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

俺を呼んだのだから、決まっているのは当然だ。でも、メニュー通りに対応する。

「Bセット二つ下さい」

Bセットとは、パスタにサラダと飲み物と当店自慢のケーキがついたセットだ。パスタは日替わりで、飲み物とケーキはメニューの中の内のいくつかから選べるようになってる。

ポニーテールの少女は二人分の飲み物とケーキをメニューを指差しながら告げてくる。俺はそれを素早く記号を用いてメモすると、メニューを回収してカウンターの中に戻ろうと踵を返す。

「あ、あの……！」

そんな俺をポニーテールの少女が呼び止めた。俺は振り返ると、無言で首を傾げる。

「昨日、学校の近くでバイク事故を起こされていましたよね？」
肯定する代わりに眉間にシワを寄せた。

「実はあかね、あの時教室から見てたんですよ」

ポニーテールの少女ははにかんだ笑みを浮かべる。

「はあ」

俺が間の抜けた返事をする、さらに続ける少女。

「お体は大丈夫なんですか？」

「なんとか」

「そうですか、それはなによりです。ところで、ここでバイトさせているんですか？」

「ご覧の通りです」

「あはは、ですよ」

少女は何が楽しいのか、終始笑顔を絶やさない。でも、俺はまったく楽しくなかった。

「あつ！ あかねは“織田赤音”^{おた あかね}って言います。あなたのお名前はなんていうんですか？」

聞いてもいないのに勝手に名乗り、あまつさえ俺の名前を聞ってくるなんて。こいつは一体何を考えているんだ。……まさか逆ナンってわけじゃないよな。まあ、こんな質問に答えてやる義理なんてないから、名乗らないけどな。

俺が無言で突っ立っていると、

「客が聞いているんだから、名前くらい教えなさいよ」

茶髪の少女が口を挟んでくる。そちらに目を向けると、茶髪の少女は冷ややかな視線で俺を見つめていた。むかつくが、こいつの言うことももっともかもしれない。お客様は神様らしいからな。仕方が無いから答えてやるか……。

「……孫、悟空です」

勿論、本名じゃないが。

別にこいつらとお友達になるわけじゃないから、本当の名前を言う必要なんてないだろう。

「孫悟空さんですか。ステキなお名前ですね」

ポニーテールの少女、織田赤音は明らかに偽名だとわかる名前にえらく関心した様子だ。そんな赤音を前にして、茶髪の少女は呆れたように溜息を吐いた。

ケーキをテーブルに並べると、赤音は手を合わせて嬉しそうに微笑んだ。その正面のソファに腰掛ける茶髪の少女は、赤音とは正反對につまらなそうな顔をしていた。

カウンターの中に戻ると、皿洗いを再開する。

ちらりと、二人の少女に視線を向けた。赤音は幸せそうに満面の笑みを浮かべてケーキを頬張っているが、茶髪の少女は特に何の感慨も無いといった様子でケーキを口に運んでいた。

茶髪の少女の顔は、輪郭がシャープでやや釣り上がった双眸の間をすらりと細く高い鼻が伸びており、その下には薄い唇がある。少々彫りが深く髪や瞳、肌の色素が薄いことから、僅かに異国の血が混じっているのではないかと思われる。一方、赤音は丸顔で、目はやたら大きく垂れていて、鼻は小さく唇が若干厚い。彫りが浅く、真っ黒な髪と瞳はまさに純和風といったところか。無表情でどこか知的で大人びた雰囲気を持つ美人の茶髪と、感情表現豊かで少し間の抜けた子供っぽい雰囲気を持つ可愛い女の子の赤音。本当に対照的なコンビだと思った。

二人共容姿が良いから、まっとうな男なら先程のように話しかけられるだけで泣いて喜ぶのかもしれないが、俺はそんな気にはなれない。あいつらを見ていると、昨日の事故の記憶がまざまざと蘇ってくるからだ。俺が先程無愛想だったのには、実はそういう理由もあった。

バイク屋によると、早くても修理に二週間はかかるそうだ。買い換えた方が良いんじゃないかと言われたが、思い入れのあるバイクだからまだ手放す気にはなれなかった。

あの時は危うく人身事故になりそうだったから多少びびっていたが、冷静な今では茶髪への怒りがふつふつと湧いている。あの茶髪が目の前に出てこなければあんなことにはならなかったのだから。

昨日は本当に散々だった。事故るし、マスターに叱られるし、コートを忘れて寒くて死にそうだった。まさに踏んだり蹴ったりとはこのことだ。

そういえば、最近、あいつらの通う聖城女学院の生徒が相次いで行方不明になるという事件が起こっているらしい。失踪した少女達はいつものように登校し、授業を受けた後、帰宅することなく消えてしまうそう。少女達の部屋から衣服などの生活必需品はまったく減っておらず、金を下ろした記録も残っていないため計画的な家出とは考え難い。どうやら警察は誘拐事件であると睨んでいるようだ。

ひょっとしたら、多感なお年頃の少女達は、いつも同じで退屈な日常に嫌気がさして、突発的に刺激と自由を求めてどこぞへと旅立ったのかもしれない。そうなると子供であるそいつらはすぐに壁にぶつかる。まず、居場所を特定されてしまうから貯金を下ろせず金が無い。素性を知られると厄介だから身分証明もままならず、仕事にありつけないし住むところも見つからない。だから、まともな生活なんて出来ないだろう。途方に暮れていると、やがて親切そうな大人が現れる。彼らは甘い言葉で巧みに近寄ってくるので、世間知らずの子供はすぐに心を開く。だが、それはハイエナだ。子供は裏社会では需要が高い。しかも女となるとなおさらだ。ハイエナ達は最初は物凄く優しいが、やがて醜い本性をあらわにする。子供達はその頃によく騙されたと悟るが、すでに遅く、あとは地獄の日々が待っているだけ。あんなに嫌がっていた退屈な日常とやらには二度と戻ることは出来ないのだ。

そう、俺のように。

もつとも、俺に寄って来たのは腹黒い大人などという可愛いものではなく、邪悪な魔女だったけどな。

なんて冗談はさておき、ひょっとしたら、これは俺と同じ“向こう側の人間”の仕業かもしれない。確たる証拠は無いが、俺の第六感がそう告げている。

ふと、時計を見た。短針は十一を指しているから、現在午前十一時。しかも平日。学生ならば授業の真っ最中だ。なのに、なんでこいつらはこんな所にいるんだろう。という疑問が脳裏をよぎったが、

気にしないことにした。こいつらが単位を落として落第したって知ったことじゃないからだ。茶髪にいたってはこれで落第したら少しの趣味くらいだ。

「こらっ、手が止まってるぞっ」

マスターは俺の尻を軽く叩いた。

まだ働き始めて三日目だけど、もうここ辞めようかな……。

「すいません。お勘定お願いしま〜す」

「はいはい〜」

いつの間にか食事を終えた赤音達がレジの前に立っていた。俺はまだレジの使い方を覚えていないので、マスターが小走りで向かう。巨体を窮屈そうに縮めて、不器用そうな太い指を素早く動かし、キーを操作するマスター。

会計が終わると、

「ごちそうさまでした〜」

赤音は丁寧にそう言うのと、ドアを開く。すると、何も言わずに茶髪が外に出る。料理を注文する時も茶髪の方まで赤音がしていたし、フォークやナイフを茶髪に手渡したのも赤音、そして茶髪のためにドアを開いたのも赤音だった。

赤音は茶髪のメイドか何かなのか？

聖城女学院はお嬢様学校だ。お嬢様といってもピンキリだろうから、中流家庭の生徒もいるだろう。だが、この茶髪はピンの方……つまりとんでもないお嬢様なんじゃないだろうか。自分専属のメイドを学校にお供としてつけてもらえる程の。ふと、昨日そんな上流階級のお嬢様を危うくはねてしまったことを思い出す。俺の頬を冷や汗が伝う。

社会的に、抹殺される……！？

「あなた達、今度は学校サボらずに来て頂戴ね」

「は〜い、わかりました」

赤音がドアを閉める音で、俺は我に返る。まあ、今更失うものなんてないか。

それにしても疲れた。接客って結構大変だよな。

俺が深く溜息を吐くと、

「これで疲れてちゃまだまだね。もうすぐお昼だから、お客様が一気に増えるわよっ」

いつの間にかカウンターに戻ってきていたマスターが指を立てて言う。俺はもう一度溜息を吐いた。

わたしは暗い廊下を歩き、巣穴となっている空き教室に向かっていた。肩の上には先程捕らえた獲物を背負っている。すでに何人も行方不明者が出ているせいか、今回の獲物はかなり警戒していてこの前のようにすんなり誘い出すことが出来なかった。だから、隙を見て強引に連れ去ってきたのだ。

空き教室の前まで来ると、ドアを開き、抱えていた獲物を投げ入れる。リノリウムの床にしたたかに体を打ちつけたその獲物は、呻き声を上げて目を覚ました。

「気がついた？」

わたしが顔を覗きこむと、獲物の少女は思考が停止したかのように呆然と見つめ返してくる。起き抜けで目の前にわたしみたいな化け物がいたら、普通こうなるよね。

「きゃあああああああああッ！」

そして、思考が追いつくと、恐怖のあまり悲鳴を上げた。なかなか良い反応だ。

わたしは獲物から離れると、

「くすくすくす。周りをよく見てみなよ。あなたのお友達がいつばにいるよ」

と、言って大げさに両手を広げる。

獲物は言われるままに周囲を見回す。部屋中に張り巡らされた糸と、その所々に貼り付けられた干乾びた獲物達。おまけに床に広が

る血液と、壁際に置かれた肉塊。そんなありえない状況下ですでおかしくなってしまったのか、ただひたすら絶叫する新しい獲物。その声はわたしの鼓膜に心地よく響いた。

わたしは系にとらわれた獲物の一人の頬を撫でながら、

「前は彼女達のように系で拘束して、長い時間をかけて少しずつ生気を吸い取っていたんだけど……」

と言い、がたがたと震える新たな獲物に一步步近寄ると、

「聞いてみたくなっただんだ」

「な、何を……？」

「骨が折れて、肉に突き刺さって、血が吹き出して、あなたが泣き叫ぶ声を」

わたしがさらに一步步近づくと、獲物は短い悲鳴を上げる。

「安心して。血の一滴だって無駄にはしない。あなたが死ぬ瞬間まで、たつぷりと楽しんであげるから」

そう言っただけで、獲物の顔がわたしの影で暗く翳った。瞳にはわたしの顔が映っている。わたしは亀裂のような口を開き、笑っていた。

疑惑の代償？

ここR街には一本の川が流れている。川はR街と隣のT街を西と東に隔てていて、T街に直接行くには二本ある鉄橋のどちらかを渡るしかない。

俺はその川沿いの土手を軽く走っていた。遠くまで伸びたアスファルトの道は、夕日に照らされて紫色に染まっている。

俺はまっとうな人間じゃないから、少々走ったところで持久力がついたり、体が絞れたりするといったことはなく、あまり意味がない。だから軽いウォーミングアップと、昔からの習慣でなんとなく続けているにすぎない。

ひとしきり走ると、坂を下って草が生い茂った河川敷に立つ。周囲を見回し、人が居ないことを確認すると、ファイティングポーズを取った。

肩幅くらいに脚を広げて、首をやや左に向ける。拳を軽く握り、右拳を右頬の辺りにつけ、左拳を顎から拳一個分前に出す。そして膝を軽く曲げて、右踵を上げる。ボクシングの右構えだ。

後足で地面を蹴り、前足に素早く体重を乗せ、体重移動によって上体が前に出ると同時に前方やや内側を狙って真っ直ぐ左拳を突き出す。ジャブだ。

次に、後足を回転させ、膝を前足に引き付けて素早く体重を移動し、その勢いを前足で止めた反動を使って、体幹を回転し前方やや内側を狙って真っ直ぐ右拳を突き出す。ストレートだ。

人によるが、俺はパンチを打つ際に腹から空気を吐くようにしている。その方が動きに切れが出るように感じるからだ。

ジャブとストレートを連続で繰り出す“ワン・ツー”や、前足の回転を利用して打つ“左フック”。そして、“ワン・ツー・フック・ストレート”を打つ。

身体が温まってくると、パンチの間に前後左右へのステップや、

膝を使い相手のパンチをかわす“ダッキング”や“ウィービング”を混ぜる。

気づいたら、体中汗まみれだった。拳を突き出すことに飛び散る汗に夕日が反射して、キラキラと輝く。

「ふっ……ふっ……」

俺の体感でボクシングの三ラウンドである九分程が経過すると、動きを止めた。すると、パチパチと手を叩く音がする。音の方に振り返ると、見知った人物が立っていた。それはあの茶髪の少女だった。

「凄いじゃない。あんたボクサーなの？」

何故こいつがこんなところにいるのかと怪訝に思ったが、無視してまた動き始める。

「ねえ、シカトしないでよ」

茶髪はやや苛立った様子で近づいてきた。このままパンチを打つと危ないので、仕方なく答えてやることにする。

「元、な。……もういいだろ」

茶髪から距離を取り、もう近寄ってくるなという意味も込めて、必要以上に動き始めた。そんな俺を茶髪は何故かずっと見つめ続ける。

しばらくパンチを打ち続けたが、視線が気になって集中出来ないのでやめた。

「まだ、何か用があるのか？」

茶髪は空に視線を向けて、「うーん」と唸ると、

「特に、用事はないけど……」

と言って、俯く。

しばらく沈黙が流れた。冷たい北風が吹き、河川敷に生える雑草をなびかせ、着ているジャージに染みこんだ汗を冷やした。

「座ろっぜ」

俺が土手の斜面に腰掛けると、茶髪も釣られるように座る。遠くの空を眺めると、空の赤が群青色に侵食されつつあった。

「わたしね、人付き合いが苦手なんだ」

不意に茶髪がぼつりとこぼした。

「小さい頃から両親が不仲でさ……二人はいつも喧嘩ばかりしてた。拳句の果てにお互いまるでいないみたいに無視しだして、結局離婚しちゃった。そのせいか、どうも他人と接するのが苦手なんだ。だって、愛し合って結婚した夫婦でさえ、仲たがいで別れてしまう。だったら、友達なんてすぐに離れていっちゃうんじゃないかって思うから……」

「……………」

「だから、小学生の頃からいつも独り。誰とも上手く接することが出来ない。高校に入ったら頑張って友達作ろうって思ったけど、結局今もクラスじゃ浮いてる」

「織田赤音はどうしたんだ？」

「……あの子は特別。こんなわたしと唯一仲良くしてくれる存在」

「一人でも友達がいるんじゃないんじゃないか？」

「でも、そう思っているのはわたしだけかもしれない。赤音はわたしのこと、本当は友達だなんて思っていないくて、この想いはわたしの一方通行かもしれない」

「そんなに不安なら、一度本人に確かめてみたらどうだ？」

「……これから、確かめに行くつもり」

茶髪の横顔に視線を向けると、今にも泣き出しそうな顔をしていた。まるで、確かめる前から結果がわかっていているかのようだ。

「わたし、やっぱり間違ってたのかな。もう、ここまで来たら取り返しがつかないのかな？」

自答自問するかのように呟く茶髪。

「この世に取り返しのことなんて、きつとない。例えどんな罪を犯そうとも、その罪を償えば、やり直すことだって出来るはずだ」

「……………そう、かな」

「ああ」

茶髪は、心なしが表情を緩めた。どこか肩の荷が下りて、ほっとしているかのように見える。

「ありがと。なんか少しだけ気が楽になったかも」

そう言うつと、茶髪は立ち上がり、スカートについた雑草を払う。

「あんたもわたしと同じで人付き合いが苦手そうだったからつい話しちゃったけど、それは正解だったよ」

「ほっとけ」

俺は軽く茶髪を睨みつける。

「じゃあね……。もしかた会えたら、その時はよろしくね」

「なんか、もう二度と会えなくなるかもしれないようなこと言っただな」

「……………」

茶髪は何か言いたそうだが、困ったような顔で見つめてくるばかりだった。

「確かに、人はある日突然いなくなるものだからな。その可能性もあるか。大切な人間にも二度と会えなくなるかもしれない。……だから、言いたいことを言えずに後悔だけはするなよ」

「うん。それじゃあね。……“孫悟空”君」

と、言って茶髪の少女は去って行く。俺はそんな少女の背中をしばらく見つめ続けた。

「……後悔だけはするなよ……か」

俺にもかつて、たった一人だけ大切な存在がいた。

うつとおしいくらいにいつも俺の後についてきて、お節介を焼いてきたヤツ。ずっと一緒に居たのに最期まで優しい言葉一つかけてやれなかった。

そのことを今でも後悔している。おそらく、生きている限り、ずっと後悔し続けるだろう。

空を見上げると、いつの間にか夜の帳が下りていた。星一つ無い夜空に丸い月だけが寂しく浮かんでいる。けれど、その月はまるで血のように赤く、怪しく光っていた。

待っていた。

わたし達の教室で最後の獲物である彼女を。

暗闇に包まれた教室に、月明かりが差し込んでいる。その光に誘われるように、ゆっくりと窓に近づく。

空を見上げると、赤い満月が煌々と輝いている。そのあまりの美しさにわたしは言葉を失った。

ドアを開く音がする。どうやら、ようやく待ち人がやって来たようだ。ゆっくりと、そちらに振り返る。

「こんばんは」

「……………」

わたしの会釈に彼女は無言で答えた。

「見て、月が綺麗だよ」

また窓の方に視線を向ける。

「なんか真っ赤なの。これって、異常気象が原因なのかな」

でも、そんなことになんか興味が無いのか、彼女はわたしのことをじっと見つめ続けている。

「……………つれないな」

しばらくお互い無言の時間が流れた。教室は静寂に包まれる。あまりにも静か過ぎて、耳が痛くなった。

そんな沈黙を最初に破ったのは彼女の方だった。

「最近この学校で起こっている失踪事件……あなたが関係してるんじゃないの？」

横目で見ると、彼女は怖いくらい真剣な表情をしていた。そんな顔をした彼女を見たのは初めてだったから、おかしくてつい笑ってしまう。

「くすくす……。なあに？ そんな怖い顔しちゃって。もっと楽しい話をしようよ」

だけど、彼女はその表情を崩さない。

「失踪した人間は、全員あなたに辛く当たっていた人間。そして、彼女達が失踪したと思われる時間帯、決まってあなたにアリバイは無かった……」

そんな彼女の言葉を耳にしても、わたしは笑みを絶やさなかった。むしろ探偵気取りの彼女がなんだか微笑ましい。

「よく調べてますね。ですが、探偵さん……それだけではわたくしが犯人だと特定するのは難しいのではなくて？」

芝居がかった口調で推理小説の犯人のように、探偵役である彼女の推理に反論する。でもノリが悪い彼女は、そんなわたしの探偵ごっこに乗ってこない。

「うん、そうだね。ずっと半信半疑だった。……今日ここに呼び出されるまでは」

彼女のその一言に、

「……そうだよ。わたしが犯人。わたしが全員誘拐したの」

わたしはあっさりと罪を認める。別に彼女に自分が犯人だとばれたところで何の問題も無いし、乗ってきてくれないから、探偵ごっこももうやめだ。

彼女はわたしの自白に一瞬大きく目を開いて驚いたが、すぐに平然を取り戻した。そして、どこか哀れむような目でわたしを見る。

「なんて、馬鹿なことしたの」

その言葉にわたしの笑顔が崩れた。彼女に向き直ると、怒りをあらわにして睨みつける。

「……馬鹿なこと？ あいつらがわたしにどんな酷いことをしてきたか知ってるくせにッ！ そんな風に言うのかよ！」

わたしは声を荒げて言い放つ。でも、彼女の表情は変わらない。

「今からでも遅くない。彼女達を解放して、そして自首して罪を償って欲しい」

一言一言を感情を込めず、淡々と口にする彼女。

心のどこかで、彼女はわたしのことを大切に思ってくれていて、

誘拐のことを話しても納得して優しい言葉をかけてくれるんじゃないかって期待していた。けれど、そんなのは夢物語だったようだ。自首をしるなどと、冷静に言つてのける彼女にわたしは苛立ちを隠せなかった。

「はあ！？　なんでわたしがそんなことしなくちゃいけないわけ？　わたしは全然悪くないのにッ！」

怒鳴るだけでは気が晴れず、近くにあつた机を思い切り叩く。

「あなたがしていることは、立派な犯罪だよ」

さつきからこいつはなんで癪に障ることばかり言ってくるんだろう。わたしを怒らせて何が楽しいんだろうか。

「ふーん、そう！　わたしが警察に捕まっても良いんだ？　所詮、わたしはあんたにとって友達でもなんでもなかったってことなんだ！？」

「別にそういうわけじゃ……」

「じゃあなんでそんなこと言えるの？　わたしのことなんて見下してるからでしょ！？」

「そんなことない……。そんなことないよッ！」

彼女はわたしを睨みつけ、叫ぶ。

「嘘だッ！　本当は心の中でわたしのことをいつも見下してたんだッ！　馬鹿にしてたんだッ！」

そんな発言に対して、彼女は色々と否定の言葉を返してきたけど、もうわたしの心には届いてこなかった。何を聞いても嘘くさくてイライラするだけ。

「ああああああああああああああああッ！　黙れ黙れ黙れ黙れ黙れええええ！」

とうとう我慢出来なくなつたわたしは、髪を振り乱し、気が狂つたようにわめきだす。その感情の爆発に応えるように周囲の闇が蠢き、わたしの体を包み込む。

「なッ……何！？」

目の前の少女はそんな異常事態を前にして狼狽する。冷静沈着な

彼女でも、流石に驚かずにはいられないらしい。

闇の中で心の形に合わせて体の形を変えていくわたし。そんなわたしを彼女は目を見開いてただ見守るだけ。

やがて変形が終わると、闇が周囲に溶けるように散っていった。

「あ、ああ……」

わたしの姿があらわになると、彼女は口をぽかんと開けて、ただ呆然とこちらを見つめる。恐怖のあまり、頭が真っ白になってしまったのだろうか。

「どう？　これがわたし。わたしの本当の姿。なかなか素敵でしょ？」

彼女は何も答えない。ただ無言でわたしを見上げている。

「何とか言ったらどうなの？　『きゃー、助けてええー！』とか、『殺さないでええー！』とか、色々あるじゃない？」

ふざけた調子で茶化す。でも、やっぱり彼女は乗ってこない。

「……つまらないな。本当につまらないよッ！」

わたしは先程叩いた机をまた叩く。その机は音を立てて折れ曲がった。

「！？」

机の壊れる音で我に返ったのか、彼女は下唇を噛んで目に力を込めると、教室から飛び出して行った。

「あはははッ！　そうこなくっちゃ！」

わたしは軽い足取りで彼女を追う。すぐに、彼女の背中に追いついた。

「あはははは。まってよう」

すぐ近くでわたしの声が聞こえたからか、彼女はぎょつとして肩越しに後ろを覗き見る。焦った様子で前に向き直ると、彼女は走るスピードを上げた。でも、人を超えたわたしと、ただの人の彼女。その能力差は歴然。わたしがちよつと速度を上げるだけで、すぐに追いついてしまう。

「くッ！」

どうやら、彼女もそれに気づいたみたいだ。このまま直線の廊下を走っていても、わたしの気分次第で捕まってしまうって。

彼女は近くの教室に飛び込む。それを見て、ちよつとまずいなと思う。

聖城女学院の教室は、どれも外壁に面している。ここは三階だが、怪我を覚悟で飛び降りれば、外に出ることが出来る。流石にこの姿で外に出るのはまずいから、学校の外に逃げられると厄介だ。

わたしは全力で駆け出し、勢い良くその教室に入る。

「いつッ！」

頭に衝撃が走った。

よろけながらも衝撃が来た方向に目を向けると、そこには壊れて背もたれの部分だけになった椅子を持って、息を切らした彼女が立っていた。どうやら、窓から逃げると思わせておいて、わたしが教室に入った瞬間に近くの机の上から跳んで、全体重をかけて椅子でわたしの頭を殴ったのだらう。

流石のわたしでも少し効いた。それに向こうも気づいたのか、持っていた椅子の残骸をわたしに投げつけ、怯んだ隙に新しい椅子を手にとると、また殴りかかってくる。

「調子に乗るなッ！」

わたしは椅子を腕でガードすると、右腕を払い、彼女を吹っ飛ばす。

「きゃっ！」

彼女は数メートル飛んで、窓際の壁に背中をぶつける。

「……あ！」

ムキになって考えなしにやってしまったけど、これはいけない。彼女のすぐ後ろには外に通じる窓がある。

彼女は立ち上がると窓を開けて、躊躇う様子をまったく見せず、飛んだ。

「やったッ！」

「させるかッ！」

わたしは窓の下の校庭に向かって飛ぶ彼女目掛け、口から糸を飛ばす。

「えっ？」

その糸は一直線に飛んでいくと、彼女の右足首に巻きついた。わたしはすぐさま糸を引っ張り、彼女の体を引き寄せる。

「ぐッ！」

重力で彼女の体が落下して、わたし達を繋ぐ糸が窓枠にひっかかる。その窓枠を支点にして振り子のように動き、彼女の体は外壁に突っ込む。したたかに体をぶつけた彼女はしばらく意識を失う。その間にわたしの足元まで引き寄せると、口から糸を引き抜き、新しい糸で彼女の体をす巻きのように拘束する。

「は、離してッ！」

意識を取り戻すとみのむしみたいに体を動かし、暴れる彼女を無理矢理肩に担ぐと、巢を目指して歩き出す。

「だ、誰か！ 助けて！」

必死に逃れようとする彼女を見ると、笑いがこみ上げてくる。

「あはははは！ 大声出しても無駄だよ。この時間じゃ教室棟には生徒も教師も警備員もいない。だから誰も気づかないよ」

「くそ！」

彼女が良い具合に逃げてくれたから、すぐに巢へと辿り着く。ドアを開き、彼女を投げ入れた。

「うっ……」

この部屋の異常さに気づき、恐れおののく彼女。わたしは力いっぱいドアを閉める。

「ようこそ、わたしの巢へ」

両手を広げ、誇らしげに言う。

彼女は驚きながらも巢にかかった少女達を見回す。

「まさか、誘拐された生徒達はみんなここにいたって言うの？」

「そっだよ。みんなずっとここにいた」

わたしは混乱した様子の彼女を前にして、得意気に言う。

「なんで、誰もここに気づかないの……？　うちの学校には警備員もいるんだ。こんなあからさまに異常な部屋、絶対誰かが気づくはず！」

そう、いくら使われていない空き教室とはいえ、毎日見回りをしている教師や警備員が気づくはず。なのに誰も気づかなかった。

「わたしの糸で覆われた巢にはね、“そういう力”があるの。だからここはただの人間だけでは決して入ってこれない結界なんだ」

「そんなことって……。あなた、一体何なの？」

「さあね？　わたしにだってわからない。気づいたらこうなってた。きつと、神様が可哀想なわたしを哀れんで、力を与えてくれたんだよ」

「神様なんて、いない……！」

「わからないよ？　だって、こんなこともあるんだ。それが神様がどうかはわからないけど、わたしをこんな風に変えちゃえる凄い存在が、この世のどこかにいるのかもしれない」

「……………」

彼女はそこで唇を噛み、憎々しげに天井を見上げる。

「何？　ひよつとして、嫉妬してるの？　そんな頂上の存在に選ばれて、人間を超えた存在になれたこのわたしに！」

「……………」

「ん？」

彼女が何かを小さく呟くが、よく聞き取れない。

「……違う」

「へ？」

「違うって、言ってるの！」

彼女は真っ直ぐわたしを見つめると、

「もしそんな神様みたいなのがいるんだとしたら、なんて最低なヤツだって思ったんだ！　だって、わたしの大事な友達をこんな醜い姿に変えて、しかもわけのわからない力まで与えて……！　確かにここにいる生徒達はあなたをいじめてた。あなたが辛かったのも知

つてる！ でも、あなたにはわたしが居たでしょ？ いったって、わたしがあなたの力になったでしょ！？」

「……黙れ」

「あか……」

「黙れって言うてるんだよ！ いったってわたしの力になっただど？ 何だよその偉そうな言い方！ だから、わたしはお前のことが嫌いなんだッ！ お前はいつだって、上から目線でわたしを見下してる！ 無能で可哀想なわたしを助けることで、自己満足に浸ってるんだ！」

「違う！ そんなんじゃない！ わたしは本気であなたのこと大切な……」

「そんな調子の良い嘘聞きたくないッ！」

完全にブチ切れたわたしは、床に這いつくばる彼女の腹を思い切り蹴った。

「ぐうッ！」

すると、彼女は胃液を吐き出し、白目を剥いて気絶した。

俺は聖城女学院の校舎前にいた。

夜の校舎は閑散とし、人気は感じられない。だが、俺の嗅覚が告げていた……敵はここにいます。

昇降口の両開きの扉を押した。鍵はかかっていない。おそらく、“先客”が開けたのだろう。

下駄箱を横切り、土足のまま校内に入る。暗い廊下を進み、途中にある階段を上った。

三階まで上がると、迷わず廊下を突き進む。廊下の行き止まり手前にある教室の前に辿り着くと、ぴたりと足を止めた。 ヤツは、ここにいる。

ドアを力いっぱい開く。

部屋の中央には怪物が立っていた。そいつはまるで蜘蛛の体から人間の四肢を生やしたような外見をしている。全体的に黒いが、四肢と突き出た尻は黄色のストライプ模様をしていた。

視線を床に向ける。怪物の傍らには、さっき土手で会話を交わした茶髪の少女が倒れていた。

その部屋には巨大な蜘蛛の巣が縦横無尽に張り巡らされており、何人も干乾びた人間が磔にされている。部屋の隅には赤いペンキをひっくり返したかのように血液が床に広がっており、その中心には二つの肉塊が横たわっていた。

「楽しそうだな……俺も混ぜてくれよ」
そう言つと、不敵に笑う。

そんな俺を呆気にとられて見つめていた怪物は、我に返ると、
「なんで……？ ここには人間は誰も入ってこれないハズなのに！」
と、叫ぶように言つて、得体の知れない俺を警戒し、身構える。

「そう……普通の人間は、な」
俺は口角を吊り上げる。

「……あなた、一体何者なの？」

「お前と同じ化け物さ……“織田赤音”」

「……なんで、わたしが織田赤音だってわかるんですか？ 外見も声も口調もまったく違うのに！」

怪物 織田赤音は正体を言い当てた俺に驚きを隠せない。

「俺には化け物とそうでないものをかぎわかる嗅覚が備わっている。事故を起こした時、お前が“普通の人間では顔を見分けることすら出来ない程離れた”校舎からこちらを見ていたことには気づいていた。何故ならその時嗅ぎ取ったからだ……俺と同じ、向こう側の人間の臭いを」

「なんだ、最初に出会った時からわかってたんですね」
「そうだ」

赤音の顔からはあまり表情は伺えないが、どこか感心した様子だ。

「……それで、ここには一体何をしに来たんですか？」

「お前に聞きたいことがあって来た」

赤音は首を傾げる。

「……何です？」

「何故こんなことをしている？」

初めて赤音の存在に気づいた時、一連の誘拐事件の犯人はこいつかもしれないと思った。さらにその日の帰り、妙な時間に独り屋上で佇むこいつを見て益々疑いを深めた。そして先程の茶髪との会話でそれは確信へと変わった。

「こいつらがわたしの善意を利用して下僕のように扱い、馬鹿にしてきたからですよ」

「成る程な。つまり、このお嬢様方に復讐したというわけだ」

「その通りです。みんな死んで当然のクズばかりですよ」

「……そこで寝てる茶髪もか？」

「ええ、表面上は友達面していたけれど、心の中ではわたしを見下していた最低な女なんです」

「……そうか」

倒れている茶髪に目を向ける。どうやらこいつの想いは赤音には通じなかったようだ。

「ならば、俺はお前を殺しても止める」

「何ですか？」

俺はふつと鼻で笑う。

「きつと、今のお前じゃ理解出来ないさ」

何を言っても、今の赤音の心には多分届かない。一番こいつのことを想っている茶髪の言葉すら届かなかったのだから。

赤音は納得いかないといった様子で、腕を組んで首を捻る。しばらく「うーん」と唸ると、何かを思いついたのか、手を叩く。

「じゃあ、わたしはあなたを殺してもその女に復讐しますねっ」

赤音は口を吊り上げ、にやつと笑った。

やはり、戦わなければならないのか。
俺は両腕を広げ、拳を握る。

「……変身」

そう呟くと、俺は闇に覆われた。

闇が俺の体を作り変えていく。

鋼のような皮膚に、バネのような間接に、仮面のような頭部に。
肉体が完全に化け物の姿に変換されると、俺を包む闇は四方に散った。

そんな俺の姿を目にした赤音は、

「へえ、わたしとは違ってまるで生き物じゃないみたい。格好良いですね、悟空さん」

と言つて茶化してくる。

俺は首をゆつくりと横に振る。

「俺は孫悟空じゃない。たちはな“立花葵”だ」

本名を名乗ると、赤音の瞳がざらりと輝き、その表情は怒りに満ちあふれた。

「……そうだったんですか。じゃあ、わたしに嘘をついていたんですね。……つまり、わたしを馬鹿にしたってことですね？」

許せない！」

赤音の中で殺意が膨らんでいくのを感じる。それを合図として、俺は赤音目がけて飛び込んでいった。

「シッ！」

後ろ足で蹴った勢いを左足で床に踏み込み止めると、その反動を左拳に乗せて突き出す。赤音はすんでのところかわし、ドアから廊下へと飛び出して行った。

「逃がすかッ！」

廊下に出て、赤音を追う。どうやら身軽さは同じくらいのようにだ。走ってもなかなか追いつけない。

不意に赤音は立ち止まり、後ろに振り返る。これを好機と見て、俺は勢い良く床を蹴り、赤音に向かって飛ぶ。

すると、赤音の口から物凄い速度で白い糸が発射された。その糸は床から離れた俺の足に絡みつく。

「くッ！」

そして赤音がその糸を力いっぱい引くと、俺はバランスを崩し、仰向けに転倒した。

赤音はそんな俺を見て楽しそうに笑い、糸を持つ手を思い切り上げた。糸が波打ち、俺の足が持ち上がり、そのまま釣られるように体ごと空中に引っ張られる。

「ぐはッ！」

天井に叩きつけられると、そのまま床に落下していく。だが、これだけでは終わらなかった。赤音は今度は糸を下に引き、落下速度をさらに速める。

「がはッ！」

俺の体はしたたかにリノリウムの床に叩きつけられた。体中が痛い。しかも呼吸が上手く出来ず、苦しい。

立つこともままならず、床に横たわっていると、

「もういっちょ！」

赤音がまたもや糸を持ち上げる。

「これ以上……やらせる、かよッ！」

俺は右腕を真一文字に薙ぎ払う。すると、俺の足に絡まった糸が千切れた。それを見て、赤音が不思議そうな顔をする。

赤音の糸のように俺にも特殊な能力があった。それは、体のいたるところから刃を出せるという力だ。

ようやく苦痛が治まった俺は、起き上がると身構えた。

「これから、本番だ」

俺と赤音は一定の距離を保ち、対峙している。まだ若干のダメージは残っているものの、殆ど振り出しに戻った状態だと言える。

また俺から先に仕掛けた。

先程のように飛んで一気に間合いを詰めようとすると、弾丸のように速い糸を途中で避けることが出来ず、足を捕られて動きを封じられてしまう。だから、今度は駆け足で距離を縮める。地に足がついていればラグビー選手のようにジグザグに動き、なんとか避けられるだろう。多分、あの糸は連射出来ない。糸を発射してもあの口の中に見え隠れする器官と繋がったままだからだ。つまり、一回かわせば赤音は無防備になり、容易に懐に入ることが可能なのだ。

だが、そんな俺の考えをあざ笑うかのように、赤音は糸を続けざまに吐き出す。短い糸の塊を機関銃のように飛ばしてくる。それを辛うじてバックステップで回避し、元居た場所まで戻った。

この糸には粘着性があるから、迂闊に当たると動きを封じられるかもしれない。それに、他にもなんらかの特殊効果が備わっている可能性もある。だからなるべく未知の攻撃には当たりたくない。

長距離では飛び道具の無いこちらが不利だ。最初の時のように一気に間合いを詰めると、地面に着地する前に糸を吐かれ、足を取られる。走って近づいた場合でも糸の連射で、牽制されてしまう。おそらく連射された糸を全て避けることは無理だろう。何故なら体を動かすよりも、赤音が首だけを動かす方が圧倒的に速いからだ。

ならば、どうやって自分の得意な距離まで近づく？

こちらに打つ手が無いことを理解しているのだろう。赤音に自ら攻めてくる気は無さそうだ。そんな迎撃体勢を取る赤音の体を観察する。元が女だからだろうか、人間にしてはでかいが、化け物にしては矮小だ。

そこで、一つの答えが出た。

思い切り床を蹴って、赤音に向かって飛ぶ。やはり赤音は一本の長い糸を足目がけて吐き出してくる。それを、待っていた。

「え？」

次の瞬間、赤音にとって予想外の出来事が起こった。

糸は俺の足ではなく、“左腕”に巻きついている。俺が空中であえて体勢を崩し、前のめりになり、赤音が狙っていた足があった位

置に手を伸ばし、あえて糸に当たったからだ。

床にヘッドスライディングをし、うつぶせになっていた俺はすぐさま立ち上がると、腕に巻きついた糸を力任せに引っ張る。赤音はすぐさま対抗して糸を引くが、俺が競り勝ち、赤音の体はこちらに引き寄せられた。外見的に俺よりも力が無いと踏んでいたが、どうやら正解だったようだ。

そう、答えは簡単だった。こちらから近づくのではなく、相手から近づいてもらうのだ。

「くッ……しまった！」

気づいた時にはもう遅い。赤音は俺がもつとも得意な距離まで近づいていた。

「シッ！」

俺の射程に入った瞬間、カウンターで右ストレートをお見舞いする。左頬に俺の拳がめり込み、赤音は体を回転させて倒れた。

常人ならばこれで完全にノックアウトだが、そう簡単にはいかないようだ。赤音はよろよろと立ち上がった。

「ぎゃあああああああッ！　痛い痛い痛い痛いッ！」
頬を押さえて喚く赤音。

「このクソ野郎ッ！　絶対ぶっ殺してやるっっっっ！」

赤音は俺に向かって突っ込んできた。どうやら完全に我を忘れているようだ。右手を振り上げながら距離を詰めると、俺の顔面目がけて振り下ろしてくる。しかし、それを冷静にダッキングで左にかわし、左足に乗った体重を右足に移動させる力を利用し、フックを赤音の右頬に叩き込んだ。さらに間髪入れずに体を左に引き、左足に体重を移動し、やや前傾姿勢になり、赤音の右脇腹に左拳を突き刺した。赤音は脇腹を押さえ、膝をつく。

「ぐっっっっっっっっっっっッ！」

相手が立ち上がるのを待っている程お人よしじゃない。呻き声を上げ、苦悶の表情を浮かべている赤音の顔面に右回し蹴りを叩き込む。赤音は勢い良く横に倒れ、右側頭部を床に強打した。

「あああああああああッ！」

赤音は顔を押しさえ、床を転げまわる。そんな駄々っ子のような赤音に流石の俺も呆れて手が出ない。しばらく様子を伺っていると、赤音はぴたりと止まり、立ち上がった。

[illegible]

赤音は涙を流しながら怨嗟の声を上げる。すると、まるでその殺意に応えるかのように、赤音の姿は変化していった。めきめきと不快な音を立てて、両腕の付け根から新たな腕が二本ずつ生えてくる。益々、蜘蛛のようになった。

どうやら　ようやく俺の獲物に相応しいまでに成長したようだ。
今までは僅かに境界線を超えていない状態だったが、今この変化に
よって完全に超えた。

「……これで、心置きなく殺せる」

そう呟くと、俺は愉しそうに笑う。

「シャアアアアアアアアア！」

奇声を発すると、赤音は真横に向かつて飛んだ。壁に張り付くと、手足を動かして天井まで移動し、ぶら下がったまま停止した。

「へえ、面白い芸を覚えたじゃないか」

そんなおどけた言葉とは裏腹に俺は緊張していた。何故ならこの能力と、壁と天井の距離が近い廊下は相性が抜群に良いからだ。ここは赤音にとつては無重力空間に等しく、上下左右を縦横無尽に行き来出来る、テリトリーとなった。

「キシヤアアアアアアア！」

赤音は体を丸め、自らの肉体を一発の砲弾と化して、物凄い勢いで落下してきた。それを俺はバックステップでなんとかかわすが、赤音はすぐさま横に飛び、手足を壁につき、間接のバネを使ってこちらに向かつて跳躍する。それも身を屈めてかわした。

「シャアアアアアアアアア！」

反対側の壁に張り付いた赤音は、天井に飛び移ると、再び落下し

てきた。こちらと同じようにバックステップでかわす。

攻防が続く。赤音の動きはなかなか速いが、正面に捉えてさえいれば、当たることはまずなかった。赤音が体を動かすよりも、俺が体の向きを変える方が速いため、後ろを取られはしない。かといって、自由自在に飛び回る赤音に攻撃を加えることは困難だった。一瞬動きが止まる壁に張り付いた時がチャンスだと思っていたが、赤音もそれを察しているのか、俺に近い方の壁には近づかない。

「ぐはッ!？」

そんなこう着状態が突如破られた。赤音の横からの攻撃が俺の脇腹に突き刺さったのだ。

「なんだ……これは？」

気づくと、俺の体は動かなくなっていた。四肢をやや開いた状態で固定され、びくともしない。

「キュルキュルキュル」

そんな俺を見ると、赤音は奇妙な音を立てて笑っていた。

目を凝らす。周囲には細い糸が張り巡らされていた。その糸は手足、頭、胴を固定し、俺を拘束している。どうやらまんまと赤音の術中にはまったらしい。これまでの赤音の行動は俺に攻撃を加えていたのではなく、動きを封じることが目的だったのだ。

腕が生えた時、赤音はさらに向こう側に近づいた。体の進化と共に自らの性質を理解し、もっとも適した戦い方をしたのだ。

俺はすぐに体から刃を出して糸の呪縛から逃れようとした。しかし、

「ぐッ……出ない!？」

何故か刃は出なかった。

先程の部屋にあった干乾びた死体から察するに、この糸には触れている生物の生命力を吸うという特性があるようだ。おそらく、人間でない俺の場合は肉体を構成する闇がこの糸に吸われ、上手く能力を使うことが出来なくなっているのだろう。

赤音はゆっくりとこちらに近づいてきた。まるで、ヤツは死刑執

行人で、動きを固定された俺はギロチンで首をはねられるのを待つだけの死刑囚のようだ。

「キュルキュル」

また妙な笑い声を上げると、赤音は俺の顔面に向かって拳を振り下ろす。先程とは段違いの速度で放たれたパンチは、頭を固定されて避ける術の無い俺の顔面を強打した。それで調子を良くしたのか、俺の頬を殴り続ける。その間、赤音は終始笑みを絶やさなかった。

その笑顔を見て、以前、赤音が“アン・ドン・ジュアン”に来た時のことを思い出す。生意気で無愛想な茶髪の前で無邪気に笑っていた赤音。あの表情は実は紛い物で、この醜惡なものこそ本当の笑顔だとも言うのだろうか。

多分、こいつは自分を偽って生きてきた。どんなに辛いことがあっても、他人の前では明るく振舞っていたんだ。けれど、茶髪の前にいる時の顔も全部作り物だったのだろうか。いや……きっと茶髪の想いは通じていたはずだ。だって、茶髪はあんなにも強く想っているのだから。だから、あの時見た赤音の笑顔は本物だったはずなんだ。

俺は殴られ続けた。顔だけでなく、腹や背中も。動きにキレがない、ただ力任せの素人パンチだが、進化した赤音の力はかなり強く、殴られる度に体が悲鳴を上げる。だが、俺は泣き言一つ言わず、ひたすら赤音を睨み続けていた。

「キシヤアアアアアア！」

それが気に喰わないのか、赤音は雄叫びを上げると俺の背面に立ち、首に腕を回してがっちり固めた。力を込めて、俺の首をきつく絞める赤音。このまま絞め続けられれば、人間でない俺でも死に至るだろう。

だが。

「ぐげ……」

首を絞める腕の力が緩んだ。赤音の腕と系の束縛から解放された俺は、中腰だった体を起こす。すると、赤音の腕は力なく垂れ下がった。

赤音は背中から無数の刃を生やしていた。そして、その刃先は赤音の血液で赤く染まっている。

「やま、あらし……」

俺は体中のいたるところから刃を伸ばしていた。それが体を拘束していた系を断ち切り、赤音を貫いている。

使い勝手の良さそうな赤音の系には一つ欠点があった。それは自らの力まで吸われてしまわないように、“赤音が触れている間は系の効果が消失する”ということだ。

最初に足を取られた時、俺は刃を出して系を切り裂いた。殴られている間中、ずっとその時と今とでは何が違うのかと考えていた。そして、この結論に至ったのだ。

赤音は俺への怒りで我を忘れていたため、そのことをすっかり失念していたのだろう。

全ての刃を引っ込めると、赤音の体は床に崩れ落ちた。

疑惑の代償？

聖城女学院に入学してから、わたしは友達を作ろうと必死だった。とにかく印象を良くしようと、顔に笑顔を貼り付けて愛想よく振舞った。人が嫌がる仕事も進んで引き受けた。

けど、長かった孤独な生活はわたしに友達の作り方を忘れさせていた。どんなに親切にしても、誰もわたしと友達になってくれない。絶望し、諦めかけていた頃、わたしに近づいてきた人達がいた。彼女達はわたしがなんでも嫌とは言わずやることに目をつけたのだ。気づいたら、わたしは彼女達の下僕になっていた。

「何これ？ あたしが頼んだのはヤキソバパンだろ？ なんでコロツケパン買ってくんだよ！」

四人の内の一人、英子がわたしを睨む。

「ごめんね、ヤキソバパン売り切れてたんだ」

わたしは笑顔で言った。

「マジでつかえねー」

英子が言っと、他の子達がけらけらと笑う。

「こいつ、ドンくせえから仕方ねえよ」

そんな言葉を浴びせられても、わたしは表情を崩さない。

「コロツケパン嫌いなんだよ！ あーあ、ヤキソバパン食いてえよ！」

わたしはひたすら笑顔で「ごめんね」を繰り返す。

「つたくよお、へらへら笑ってんじゃねえよ！ 気持ちわりいんだよ！」

わたしはコロツケパンを投げつけられる。それでも笑顔を絶やさない。

「いつも笑っててさあ、悩みなんか無いんじゃないの」

わたしにだって悩みくらいはある。わたしは笑顔を絶やさない。

「ただの馬鹿だからな」

わたしは馬鹿じゃない。わたしは笑顔を絶やさない。

「あの……ところで、お金は？」

「あん？ あたしら“友達”だろ？ だったら、奢るのが当たり前じゃねえか」

「……そ、そうだ、ね」

彼女達に罵詈雑言を浴びせられたうえにパン代を踏み倒され、わたしの心が折れかけていた時、背後に気配を感じる。振り返ると、そこには不機嫌そうな顔をした少女が立っていた。わたしとは対照的な大人びた顔をした美少女だった。

「あんた達、さっきから聞いているとウザいんだけど？」

少女はそう言つと、英子達を睨みつける。

「なっ……」

英子達は絶句し、後ずさる。

「そんなにパン食いたいんだつたら、自分達で買ってくれば？」

少女はまるでつまらない物を見るような目で四人を見据えた。そんな少女に英子達はひるむ。

「マジシラケル。学食いこうぜ」

英子がそう言つと、他の三人もその後について行った。

「あの、ありがとう……ね」

わたしが礼を言つと、少女はつまらなそうにこちらを一瞥し、去っていった。

周囲に誰も居なくなると、わたしは笑顔をやめた。自然と眉間にシワが寄つていく。噛んだ唇からは血がにじんでいる。わたしは怒りで震えていた。

畜生。

みんな馬鹿にしゃがって……。どんなに辛くても、毎日毎日にここにここに、一生懸命頑張ってきたっていうのに。ずっと孤独で、お前達とは比べ物にならないくらい辛くて苦しいのに。なんで誰もわたしを受け入れてくれないんだよ。

わたしを侮辱し、笑っていた四人の顔を思い出す。頭の中で何度

も何度もナイフを刺してやった。胸、腹、手、足、眼球……わたしの中に蓄積された怒りをぶちまけるように、力任せに刺し貫いていく。みんなわたしに助けて下さいと、泣いて懇願しながら死んでいた。そんな様子を想像し、自然と笑みがこぼれる。他にもわたしと親しくしてくれないクラスメイトや、役に立たない教師を思い浮かべては、次々とナイフで突き刺してやった。想像の中のわたしは、返り血を全身に浴びて、狂ったように笑い続ける。

最後に、つまらなそうにわたしを一瞥して去って行った少女を思い出す。成績優秀で、運動神経も悪くないその少女は、わたしと同様にクラスで浮いた存在だった。でも、彼女は周囲に溶け込めず放り出されたというよりは、自ら進んで距離を取っているといった感じだ。そして、いつも遠くから冷めた瞳でクラスメイト達を眺めていた。まるで、下らないものを見ているように。

そうやって、わたしのことも一緒に馬鹿にしてるんだろ？ あいつらみたいにな、このわたしを！ 気まぐれで哀れなわたしを助けて、良い気になってんじゃねえよ！ ちよつと勉強が出来るからって良い気になってんじゃねえよ！ 顔が綺麗だからって良い気になってんじゃねえよ！

もう、あの女の全てが憎たらしい。わたしは執拗に彼女にナイフを突き立ててやった。

気づくと、わたしは倒れていた。体のあちこちには穴が開いていて、そこから大量の血が流れ出ている。立ち上がろうとするけど、体に力が入らない。わたしはもう、死んじゃうんだろうか？

なんとか顔を上げてみると、目の前には赤く染まった黒い怪人。立花葵が静かに佇んでいた。腕を力なく垂らし、背中を丸めている様子がまるで亡霊のようだ。

そうか、こいつがわたしをこんな目に遭わせたのか……。胸の内にくづくつと、マグマの如き怒りが湧き上がる。その怒りが糧となり、わたしの体に力がみなぎると、ゆっくりと立ち上がった。

「まだ、立ち上がれるのか」

葵は垂らしていた腕を上げて、構える。すると、その腕からは無数の刃が生えた。そうか、さっきのはこういうことだったのか。

葵は一気に距離を縮めると、拳を振るってきた。かわそうと体を左に傾けるが、避けきれず、頬をざっくりと削られる。

なんで……なんで、こいつはわたしの邪魔をするの？ わたしはただ、苦しめられた仕返しをしたいだけなのに！

体勢を崩したわたしに追い討ちをかけるように、葵は左拳を突き上げ、わたしの顎を打ち抜いた。その衝撃で一瞬意識を手放す。頭が後ろに傾くと、そのまま仰向けに倒れた。

床に手をつき、体を支えて上体を起こす。

目が霞む。視界がぐるぐる回っている。きつと、血を流しすぎたんだ……。

世界がぼやけて、もう何がなんだかわからない。自分がどこにいるのかもわからない。

けど、一つだけはっきりと見えているものがある。

あの、女だ。

あの女がわたしをいつもの冷たい眼差しで見ている。

「ッ！」

あいつの名前を叫ぶ。でも、上手く言葉にならなかった。

立ち上がると、ふらふらとあの女に向かって歩き出す。

「待てよ」

不意に肩をつかまれる。

「あいつのところに行く気か？」

わたしは無言で首肯する。すると、肩をつかむ力が増した。

「行くな……。行ったら、お前はかけがえのないものを失う。今は信じられないかもしれないが、あの女はお前を心の底から大事に思っている……。そして、お前も本当はそんなあいつを大事に思っているはずだ。だって、あいつは――」

お前の、“友達”だろ？

今日も辛かった。

誰もわたしと仲良くしてくれない。みんな馬鹿にしてくるだけ。

……もう、こんなの嫌だ。

昇降口から出ると、真っ直ぐに校門に向かって歩き出す。途中にあるグラウンドが夕日に照らされ、茜色に染まっていた。運動着を着た生徒達が様々なスポーツに勤しんでいる。そんな彼女達の楽しげな声がなんだか耳障りだった。

下を向き、とぼとぼと歩いていると、後ろから誰かに肩を叩かれる。またパシリにでもされるのか、それともからかわれるのだろうかと考え、恐る恐る振り返ると、さっき想像で最後にナイフを執拗に突き立てた少女が立っていた。

「暇？」

「……え？」

わたしは質問の意図がわかりかねたので、頭に疑問符を浮かべ、首を傾げる。

「これから時間あるかって、聞いているの」

少女はしかめっ面で、やや苛立っているように見えた。でも、それは思い過ごしなのか、抑揚の無い声で丁寧に言い直してくる。

「時間はある……けど」

わたしは怪訝な面持ちで言う。

「じゃあ、ちよつと一緒に来て」

そう言うつと、少女はわたしの手を握って引いた。

しばらく歩道を歩いた後、角を曲がって直進すると、土手に出た。さらに土手を進むと、坂を下り、河川敷に出る。

そこにはなんとも言えない風景が広がっていた。遠くの空が紫色に染まり、夕日に照らされた川はキラキラと輝いている。綺麗といえば綺麗だけど、少し寂しい印象を受けた。

「ここ、わたしのお気に入り場所なんだ」

「へ、へえ……」

感想に困ったわたしは、一生懸命気の利いた言葉を探しながら少女の方に向く。少女は風になびき、顔にかかった茶色い髪をかき上げる。夕日に照らされた彼女はとても綺麗で、その仕草には同性のわたしでさえどきりとさせられてしまった。

「わたしね、知ってるんだ……。あなたが一生懸命頑張ってるってこと。どんなに辛くても笑顔を絶やさないで、みんなが嫌がることを進んでやってるの、いつも教室の片隅で見てたから。……だから、ずっとあなたに興味があつて、一度こうやって話してみたかったんだ」

意外だった。

全ての人間を見下し、距離を置いていたはずの彼女が、わたしをそんな風に見ていたなんて。

「あなたって本当に凄い。それに比べて、わたしってなんて馬鹿なんだろう。本当はみんなと仲良くしたいはずなのに、傷つくのが怖くて近づこうとしない。でも、いつちよまえに寂しがってる」

少女は今にも泣き出しそうな顔で、わたしを見つめてくる。そんな少女に向かって、思わず、

「わたしと、友達になつてくれない？」

と口にしていた。すると、少女は一度驚いたように目を大きく開くと、表情を崩し、優しく微笑んだ。その笑顔に、わたしはまた、どきりとさせられたのだった。

彼女は、たった一人の大切な“友達”だったんだ。

なのに、なんでわたしはこんなことしてるんだろう。

気づいたら、わたしは涙を流していた。力が抜け、床に膝をつく。うっ……うっうう……」

リノリウムの床にぽたぽたと涙の雫が落ちて、広がった。

わたしは友達のことを信じられなかった。あの子はわたしを大切に思い、いつも気にかけてくれていたというのに。

わたしの弱い心が彼女を疑い、憎ませた。

やっと気づいた……。でも、もう遅い……。何もかも遅すぎたんだ。もう後戻りなんて出来ない。わたしはもう、きつと人間には戻れないから。それにこの体では長くはもたない。

だったら、わたしは……。

赤音は立ち上がると、身構える。人間であった頃の自分を取り戻したようだが、あそこまで闇にとらわれていては、それも一時的なものにすぎない。ならば、人間である内に葬ってやるのが人情というものだ。

バックステップで距離を取ると、こちらも構えて、右の拳に意識を集中する。

俺達は無言で視線を交わす。

赤音は理解している。自分は滅び行くしかない。でも、自ら選んだ道だから、後戻りなんか出来ない。だから赤音は最後まで全力で俺と対峙することを選んだ。

もっと早くこいつらと出会っていたら、こんな結末を迎えることはなかったのかもしれない。赤音と茶髪はいつまでも仲良くいられたのかもしれない。いや……。もうそんな甘ったれたことを考えても仕方が無いな。

二人はほぼ同時に床を蹴った。

俺の右腕は瞬時に刃で覆われる。左足で地面に着地すると同時に、跳躍の勢いを押さえつけた。

目の前には赤音がいた。渾身の力を込めて右拳を振り下ろしてくる。俺は着地の時に押さえつけた力の反動を利用して、腰を回転させた。その間、赤音の拳が俺の顔面を僅かにかすめる。

腰の回転が肩の回転に繋がり、それらの運動によって生み出された爆発的なパワーを乗せて、俺の右拳が赤音に向かって放たれた。

拳は、赤音の胸を貫いた。

「う……ぐふ……っ」

刃をひっこめると、赤音の胸から腕を引き抜く。内臓を破壊された赤音は吐血し、力なく膝をついた。

一歩後ろに下がり、赤音を見下ろす。赤音もこちらを向き、

「……………」

赤音の体は足の先から徐々に黒く変色し始める。頭の手先まで黒く染まると、崩れ落ちていき、最期には蒸発して空中に溶けた。

あれから一ヶ月が経った。

赤音が死んだことにより、彼女の巣にかけられた“人を遠ざける結界”の効果が消滅し、行方不明だった少女達が発見された。だが、見つかった時には全員すでに死んでいたそうだ。その内二つの死体は滅茶苦茶に暴行されたものだだったが、残りは全てミイラ化していたらしい。世間では謎の怪死事件としてしばらく騒がれていたが、時間が経つに連れて忘れられていき、今ではあまり耳にしなくなっ

た。
一方、少女達の死体が発見される直前に消えた織田赤音は、行方不明者扱いされていた。しかし、織田赤音も一連の事件の被害者で、まだ発見されていないが、すでに死んでいるというのが有力な説になっている。そんな織田赤音も人々の記憶の中から徐々に消えていった。

そんな風に時間は流れているというのに、俺の皿洗いの技術はいっこうに上達しない。客の数が少ない時を見計らってマスターに習うのだが、全然上手くならなかった。マスターのセクハラを恐れるあまりに緊張して上手くいかなかったのではなく、単純に俺が不器用だから上手くいかないようだ。最初にその事実気づいた時は愕然としたが、今ではその現実を潔く受け入れている。

「本当に駄目ねえ」

マスターは呆れたように溜息を吐いた。くそう、俺は絶望を超え

てここまで来たっていうのに。

その時、来客を知らせる鈴が鳴る。入り口に目を向けると、そこには見知った顔があつた。あの茶髪の少女だ。

少女は何も言わずにカウンター席に腰掛け、

「葵、奢られにきてやったぞ」

と、偉そうに言つて、にっこりと笑顔を向けてくる。それは見て
いるだけで眩しく、まるで夏の太陽のようだ。

「学校をサボる不良に奢るものなんてないぞ」

壁にかかった時計は十一時を示していた。

「いいじゃん。細かいことは気にするなよ」

少女は拗ねたように頬を膨らませる。

それにしても、出会った頃に比べると、こいつも随分変わったな。
以前は氷のような眼差しを持った女で、せいぜいしかめっ面をする
だけだったのに。今じゃこれだけこころと表情を変える。……ま
るで、いなくなった赤音のように。

「あれから一ヶ月も経つんだね」

少女が食事を平らげた後、カウンターテーブルに肘をつき、食後
の紅茶が注がれたカップを眺めながら言った。

「織田、赤音のことか？」

少女は無言で頷く。

「……ありがとね」

「え？」

唐突に礼を言ってくる少女。でもそれが何に対してなのか、俺に
はさっぱりわからなかった。

「いやさ、あの時わたしを病院に運んでくれたんでしょ？ その時
のお礼、まだ言つてなかったなと思って」

少女は照れ臭いのか、また視線をカップに落とす。

「それとさ……その時、廊下で赤音と会つたつて言つてたよね？」

「ああ」

意識を失っていた少女が目を覚めたのは、病院のベッドだった。

その場に居合わせた俺は、警察がやって来る前に軽く事件のことを尋ねた。だが、少女は学校での出来事を何も覚えていなかった。おそらく、命の危機など、日常では決して経験しないような緊張状態を強いられ続けたため、自己防衛機能が働き、無意識に記憶をシャットアウトしたのだろう。今回の件でこいつが覚えていることと言ったら、赤音が誘拐犯だということくらいだった。だから、『赤音は気絶させた少女を隠れ家に運ぼうとしたところ、土手で話を聞き、心配になって追いかけて来た俺と遭遇し、慌てて逃走した』と話した。俺にしては頑張った方だがかなり無理のあるこの作り話を、錯乱していた少女は信じた。

「その時さ、赤音は何か言ってた？」

俺は赤音の最期を思い出す。肉体が崩れゆく中

“ ありがとう……がんばってね…… ”

確かに、そう言っていた。これは俺に言ったわけじゃなくて、きっと、こいつに言ったんだ。

それを伝えると、

「……わたし、赤音みたいに頑張れてるかな」

「ああ」

「そっか」

少女はどこか寂しげに笑った。

「それじゃあ、ごちそうさま」

立ち上がり、来客用のドアに向かって歩いていく。

「冬子！」

俺が呼び止めると、少女 芥川冬子は振り返った。

「何？」

「学校、もうさぼるなよ」

俺がそう言つと、冬子は悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「ほっとけ」

[illegible]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9866x/>

月下の狩人

2011年11月12日03時22分発行